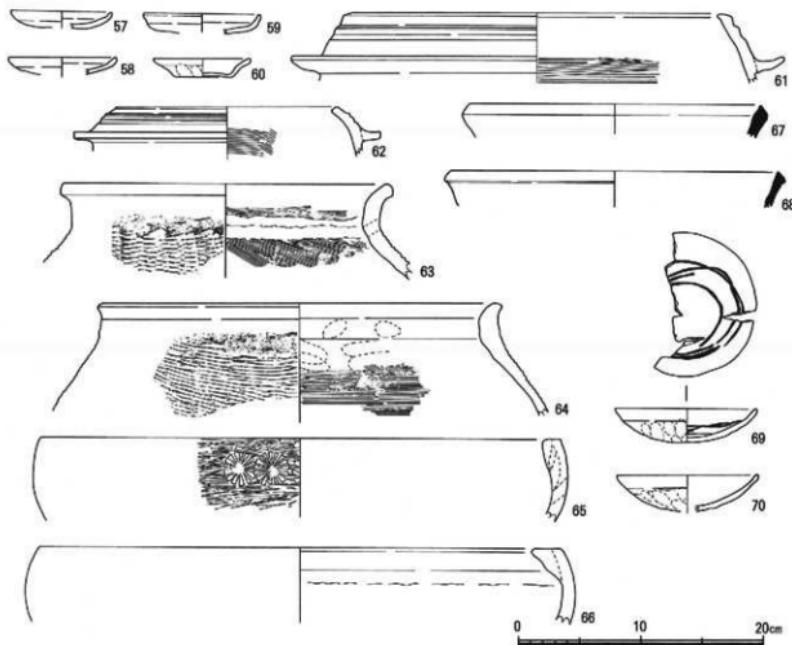


## ・包含層出土遺物

第4層および第5層から出土した14点(57~70)を図化した。一部、1/2程度の残存が認められる以外は小片化したものが大半を占めている。その内訳は、土師器小皿4点(57~60)、須恵器鉢2点(67・68)、瓦器楕2点(69・70)・瓦器土釜2点(61・62)・瓦器甕2点(63・64)・瓦器浅鉢2点(65・66)である。

土師器小皿(57~60)には、口縁部が底部から内彎気味に立ち上がる(57・58)、口縁部が底部から斜上方へ直線的に伸びる(59)、上げ底の底部から口縁部が外反して伸びる(60)がある。4点ともに浅黄橙色の色調で胎土は精良である。(60)のように上げ底で体部下半に指頭圧成形が顕著な土師器小皿は中河内地区では14世紀中期以降に認められる。須恵器鉢(67・68)はとともに東播系須恵器鉢の小片である。口縁部の形態では、(67)が逆「く」の字、(68)が玉縁状口縁を呈する。2点ともに口縁部外面に重ね焼き痕がある。瓦器楕(69・70)は和泉型瓦器楕の最終形態の特徴とされる高台を欠き、浅い楕形の形態を持つものである。(69)の見込みから体部内面にかけては雑な圓線状の暗文が施文されている。(70)は重ね焼き痕が体部外面に認められるほか、内面の灰素付着は不良である。2点ともに胎土は粗く器面に0.5~2mm大の砂粒が散見される。14世紀中葉の所産である。瓦器土釜は2点(61・62)を図化した。(61)は内傾して大きく



第10図 第4層・第5層出土遺物実測図

立ち上がる口縁部外面に2条の段を有するもので、森嶋分類のG型式にあたる。(62)は強く内傾して立ち上がる口縁部の外面に3条の段を有するもので、森嶋分類のE型式にあたる。2点ともに15世紀前半の所産と考えられる。瓦器裏は2点(63・64)圓化した。(63)がほぼ直立して伸びる頸部から口縁部が外反して伸びるもので、外端面は平坦な面を呈する。体部外面のタタキ調整は幅3cm程度の原体が使用されており、右から左方向にほぼ水平に行われている。(64)は口縁端部付近で小さく外反して、外方向にやや尖り気味で終わる端部を形成する。体部外面のタタキ調整は丁寧で原体幅は2cm程度である。瓦器浅鉢は2点(65・66)圓化した。いわゆる奈良火鉢に分類されるもので、坪之内徹氏の分類によれば(65)が浅鉢I、(66)が口縁部の形態では浅鉢IVに分類される。(65)の口縁部外面には菊花文がスタンプされている。ともに14世紀中葉以降の所産と考えられる。

#### 註記

- 註1 三宅正浩 1985『佐堂(その1)』(財)大阪文化財センター  
中井貞夫・阪田育功他 1981『佐堂(その2)-I』(財)大阪文化財センター  
中西靖人・森屋直樹他 1985『佐堂(その2)-II』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター  
註2 古川野乃 1996「5. 佐堂遺跡(93-534)の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告1』八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

#### 参考文献

- ・中河内の中世土器編年  
森島康雄 1987「西の辻遺跡周辺における中世土器の編年」「神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要IV」大阪府教育委員会
- ・土釜  
菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集  
菅原正明 1983「畿内における中世土器の生産と流通」「藤沢一先生古希記念古文化論叢」  
森島康雄 1990「中河内の羽釜」「中近世土器の基礎研究IV」日本中世土器研究会
- ・奈良火鉢  
坪之内徹 1990「中世南都の瓦器・瓦質土器」「中近世土器の基礎研究VI」日本中世土器研究会
- ・東播系須恵器  
丹治康明 1985「東播系須恵器について」「中近世土器の基礎研究」
- ・中國產磁器  
横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」「九州歴史資料館研究論集4」九州歴史資料館

## 第4節 出土遺物観察表\*

\* 凡例 重一多重 ○多い △少ない ▲稀少 拾目-L 1m以上 M0.5~1m未満 S0.1~0.5m未満 SS0.1m以下 布赤-赤色陶化土 花-花崗岩

遺物番号	図版番号	基盤	法量 (m)	○印 △印 ■印 △印 (復元値)	調査・手法	色調	胎 土					焼成状態	残存率	地 区 備考			
							外 面	内 面	素 質	反 石	石 英	雷 母	角 四 石	チ ャ ト			
1		土師器小皿	7.3 1.5 -	外面：口縁部ヨコナデ。底部薄いナダ。 内面：口縁部から底面半分ヨコナデ。底部中央部ナデ。	灰褐色 -	精良	△ S	▲ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	ほぼ完形	2・3B区 SK-201
2		土師器小皿	(9.4) (1.7)	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	黄褐色～灰白色 -	精良	△ S	▲ S	▲ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	-	口縁部 1/6	-
3		土師器中皿	(13.0) (1.9)	外面：唇部剥離のため測定不可能。 内面：	にじみ褐色 -	精良	△ S	-	内外面唇部剥離	口縁部 1/6							
4		瓦器小皿	(8.0) (1.2)	外面：口縁部ヨコナデ。底部指標圧成形跡ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰色 -	精良	△ S	良好	1/3	-							
5		丸蓋板	(16.4)	外面：口縁部ヨコナデ。体部指標圧成形跡ナデ。 内面：磨耗した表面剥離不規則。	暗褐色 灰白色	精良	△ S	-	やや不規則な磨耗	口縁部 1/4							
6		丸蓋板	- 高台径(5.7) 高台高(0.5)	外面：高台部外周部ヨコナデ。 内面：見込み粘土状堆積。	灰色 -	精良	△ S	-	-	△ S	-	-	-	-	良好	高台部 1/4	-
7		瓦器足釜	(16.0) 蹲形(19.3)	外面：口縁部ヨコナデ。周部下面から底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケメ。	灰褐色～明褐色 灰色	精良	△ S	-	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 1/12	周部以下底部付着不良
8	三	瓦器足釜	(19.0) 蹲形(24.5)	外面：口縁部から周部下部ヨコナデ。 内面：口縁部から体部ヨコナデ。	灰色 -	精良	○ S	○ S	▲ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	良好	口縁部 1/8	-
9	三	瓦器足釜	(20.0) 蹲形(24.0)	外面：周部下部から口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部から全体薄なだ。	灰色 灰白色	精良	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	△ S	-	口縁部 1/10	-
10	三	乳頭器 堅耳	(21.0)	外面：口縁部から体部側板ナデ。 内面：	口縁部暗褐色 体部明褐色 青灰色	中等	○ S	○ S	-	-	-	-	-	-	堅板	口縁部 1/12	-
12		土師器小皿	7.9 1.2 -	外面：口縁部ヨコナデ。底部薄いナダ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にじみ褐色 -	精良	△ S	▲ S	△ S	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	良好	1/2以上	1・2B SD-201
13		土師器小皿	8.0 1.4 -	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にじみ褐色 -	精良	△ S	▲ S	△ S	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	-	1/2	-
14		土師器小皿	8.6 1.15 -	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にじみ褐色 -	精良	△ S	△ S	△ S	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	-	1/2	-
15		瓦器小皿	7.8 1.4 -	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白色 -	精良	△ S	▲ S	△ S	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	-	1/2	-
16		土器小皿	8.3 1.2 -	外面：全般にわたり酸化処理層の為消去不明。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にじみ褐色 -	精良	△ S	▲ S	△ S	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	-	外表面酸化処理全面に付着	完形
17		土器小皿	8.4 0.5 -	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にじみ褐色 -	精良	△ S	▲ S	△ S	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	-	ほぼ完形	-
18		土器小皿	8.0 1.2 -	外面：口縁部強引ヨコナデにより、底部との境が崩壊、底部剥離ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にじみ褐色 -	精良	△ S	▲ S	△ S	○ S	○ S	△ S	△ S	△ S	-	完形	-

\* S-Lは擦痕による観察。S-Sについては実体線(×S)により確認できたもの。

・凡例 ■=多量 △=多い ▲=少ない ▲=稀少 ◎=特徴 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.1~0.5mm未満 SS0.01mm以下 半赤=赤色鐵化土 花=花崗岩

追 加 物 質 番 号	固 形 種 類	法 量 (kg) 口徑 高 度 底 径 (0.0元始)	基 礦 手 法		色 調						地 質 土		成 長 状 態	現 存 率	地 区 考 察			
			外 面		内 面						地 質							
			外 面	内 面	基 礦 石 質	長 石	石 英	岩 片	角 閃 石	矽 長 石	その 他							
19	三 土 礫 小 組	8.2 1.5 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	△ S S	△ S	○ S	○ S S				良好	完形	SD-201			
20	三 土 礫 小 組	8.3 1.1 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	△ S S	△ S S	○ S S				良好	完形	-			
21	三 土 礫 小 組	7.7 1.4 -	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	▲ S S	▲ S S	○ S S				良好	完形	-			
22	三 土 礫 小 組	8.1 1.4 -	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	△ S S	△ S S	△ S S	○ S S				良好	完形	-			
23	三 土 礫 小 組	8.0 1.5 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	△ S S	△ S S	○ S S					良好	球球完形	-			
24	土 礫 小 組	7.9 1.3 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	△ S S	△ S S	○ S S	△ S S				良好	1/2以上	-			
25	三 土 礫 小 組	7.9 1.5 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	△ S S	△ S S	○ S S	○ S S				良好	1/2以上	-			
26	三 土 礫 中 組	11.6 2.1 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	▲ S S	△ S S	○ S S				良好	ほぼ完形	-			
27	三 土 礫 中 組	12.0 2.2 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	△ S S	▲ S S	○ S S				良好	ほぼ完形	-			
28	土 礫 中 組	11.6 2.2 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	△ S S	○ S S	○ S S	○ S S	▲ L			良好	ほぼ完形	-			
29	四 土 礫 中 組	11.6 2.1 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	△ S S	○ S S	○ S S				良好	ほぼ完形	-			
30	四 土 礫 中 組	11.8 2.1 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	○ S S	△ S S	○ S S				良好	完形	-			
31	土 礫 中 組	11.2 2.1 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	△ S S	△ S S	△ S S	○ S S				良好	ほぼ完形	-			
32	四 土 礫 中 組	11.2 2.2 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	▲ S S	△ S S	△ S S				良好	完形	-			
33	四 土 礫 中 組	11.4 2.6 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S S	○ S S	△ S S	○ S S				良好	完形	-			
34	四 瓦 礫 小 組	(9.0) 2.6 -	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	に ぶ い 褐色 △ 精 良	▲ S	○ S	△ S S	○ S S				良好	内 部 成 長 時 の 割 離	1/2以上			
35	瓦 礫 物	- 高台径0.6 高台高0.4	外 面: 内 面:	外 面: 内 面: 外 面: 内 面:	淡 灰色 △ 精 良	▲ S							良好	高台部 1/2	-			

## IV 佐堂遺跡第1次調査 (SD-O95-1)

・凡例 順-○多量 △多い ▲少ない ▲極少 括弧-L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5~0.5mm未満 SS0.1mm以下 条赤-赤色顕化土 花-花崗岩

通 用 物 品 名 号	器 種	寸 法 (cm) 口徑 底厚 底径 (底元径)	調 整 手 法	色 調		胎 上				焼 成 状 態	理 研 所	地 区 考	
				外 面	内 面	系 質	長 石 英 母 岩 石 等	右 角 閃 石 等	チャ ート	そ の 他			
36 四 瓦器 筒	(13.6) -(3.7) 高台(6.4) 高台(6.1)	外面: 口縁部ヨコナデ。体部指端圧成 形後ナデ。高台側面ナデ。 内面: 全面ナデ。込み平行線状、体 部圓錐状の粗いヘラマガキ。	灰色~灰白色 △ 精良	▲ S	▲ S					良好	全1/2 高台全周	外因重ね焼き痕	
37 土 師 器 土 釜	(36.2) -( -)	外面: 口縁部から腹部ヨコナデ。 内面: 口縁部から腹部ヨコナデ。	にぶい褐色 △ やや粗	△ M S I M	◎ S	△ L				良好	口縁部 1/8	SD-201 内面顕化土付着	
38 土 師 器 土 釜	(36.6) -( -)	外面: 腹部ヨコナデ。体部ヨコナデ。 内面: 体部ナデ。	にぶい褐色 △ 粗	○ M S I L	◎ S	△ L				良好	腹部1/10	外因側面以下媒 付着	
39 瓦 器 土 釜	(21.3) -( -)	外面: 1段部から跨部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。	灰 色 △ 精良	○ S						良好	口縁部 1/10	"	
40 十 字 形 器 上 釜	(22.8) -( -)	外面: 口縁部、両脇、体部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡黃褐色 △ 精良	○ S	△ S	△ SS				良好	口縁部 1/10	外因側面以下媒 付着	
41 瓦 器 足 架	- -( -)	外面: 腹部ナデ。 内面: 体部ナデ。	灰白色 △ 粗	△ L	△ S	△ S				良好		"	
42 四 須 底 蓋	(27.3) -( -)	外面: 口縁部平塗ナデ。体部左半上 かりのタキの横回転ナデ。以下右上 - - 内面: 口縁部凹凸ナデ。体部ナデ。	灰白色 △ 粗 蜜	△ S	△ S	△ S	△ S			粗粒	口縁部 1/12	"	
43 陶 器 罐 底 盤	(16.5) -( -)	外面: 指端ケズリの後1段部から体部 - 上半灰白色の輪を施輪。以下露胎。 内面: 灰白色の露胎。	露胎-白色 △ 灰 白							平穏	口縁部 1/4	"	
44 土 師 器 小 底	(8.0) -( -)	外面: 口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡黃褐色 △ 精良	△ S	△ S	△ S	○ SS			良好	口縁部 1/6	SD-202	
47 土 師 器 中 底	(14.4) (3.15) -( -)	外面: 口縁部ヨコナデ。体部指端圧成 - 内面: 口縁部ヨコナデ。底部から底部 ナデ。	淡黃褐色 △ 精良		△ S				△ S	△ ○ S	良好	口縁部 1/12	"
48 瓦 器 桶	(6.2) -( -)	外面: 体部ナデ。高台部ヨコナデ。底 部弱いナデ。 内面: 体部から見込みナデ。	灰 色 △ 精良	△ S		△ S				良好	内面-一部 風化	高台部 1/3以上	"
49 土 師 器 土 釜	33.8 -( -)	外面: 口縁部ヨコナデ。面部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。面部ナデ。	淡黃褐色 △ 粗	△ S I M	○ S	△ S	△ L			良好	口縁部 1/8	"	
60 土 師 器 土 釜	(34.6) -( -)	外面: 指端全面風化のため調整不 規則。 内面: 指端全面風化のため調整不 規則。	淡黃褐色 △ 灰 褐色	△ M S I L	○ S	△ S	△ M	△ S	△ S	良好	内面と も風化	口縁部 1/6	"
51 五 瓦 器 底	(29.3) -( -)	外面: 1段部ヨコナデ。体部横方向の ヘラケズリ。 内面: 口縁部から体部水平ないし斜 め方向のヘケス。覆口3本底存。	灰 色 △ 粗	△ S I L	○ S	△ S	△ L			良好	口縁部 1/8	SD-205	
52 瓦 器 土 釜	(29.0) -( -)	外面: 1段部ヨコナデ。体部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部水平方向 のヘケス。	灰 色 △ 粗	△ S	○ S	△ S	△ S			良好	口縁部 1/8	"	
53 五 土 釜	(20.0) -( -)	外面: 1段部ヨコナデにより段を形成。 内面: 口縁部ヨコナデ。	灰白色 △ 粗	○ S I L	△ S	△ S	△ SS			良好	口縁部 1/10	SD-206 内面以下媒付着	
54 五 土 釜	(17.0) -( -)	外面: 1段部3条の段。口縁部から跨 部表面ヨコナデ。体部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体 部ナデ。	褐 灰色 △ 粗	○ S I M	△ S	△ S	△ SS			良好	口縁部 1/4	"	

・凡例 ■一〇多量 □多い △少ない ▲稀少 ○较少 一 L 1cm以上 M0.5~1cm未満 S0.1~0.5cm未満 SS0.1cm以下 春赤~赤色発化土 花~花簇

植物 名 目 科 属 種 名 号	固 有 部 位 名 稱	法益 (cm) □延 長高 度 △高 度 △幅 度 △厚 度 △深 度 △面 積 △體 積	測定・手法		色調 外観 内面 質	形態					成 熟 状 態	残 存 率	地 区 備 考				
						長 度	寬 度	高 度	角 度	固 石	サ ト ト						
			外觀	内面													
55 玉 土 藤 苔	(19.8) 門徑(26.9)	(19.8) 外観：口縫部3条の段。体部左から右 側面部ヨコナナ。体部左から右方向の ハラミガキ。 内面：口縫部ヨコナナ。体部横方向 一部縦方向のハケメ。	灰藍褐色 褐色	△ S 密	○ S 密	▲ S 密	△ S 密	▲ M 密				良好	口縫部 1/8				
			(25.8) 門徑(33.6)	外観：口縫部3条の段。体部左から右 側面部ヨコナナ。体部横方向の ハラミガキ。 内面：口縫部ヨコナナ。体部ナデ。	灰色 〃	△ S 密	○ S 密					良好	口縫部 1/8	SD-206			
56 玉 瓦 苔	(8.2) 門徑(13.6)	(8.2) 外観：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。 内面：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。	褐色 〃	△ S 精良	△ S 精良	▲ S 精良	○ S 精良				良好	口縫部 1/4	第4層				
			(8.8) 門徑(15.6)	外観：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。 内面：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。	淡黃褐色 〃	△ S 精良	△ S 精良	△ S 精良	○ S 精良	△ S 精良	赤△ S 精良	良好	口縫部 1/4				
58 土 藤 苔 小 虫	(9.5) 門徑(16.6)	(9.5) 外観：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。 内面：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。	にい黄褐色 〃	△ S 精良	△ S 精良	△ S 精良	○ S 精良				赤△ S 良好	口縫部 1/4					
			7.9 門徑(10.8)	外観：口縫部ヨコナナ。体部から底部 横方向のハケメ。 内面：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。	淡黃褐色 〃	△ S 精良	△ S 精良	△ S 精良	○ S 精良	△ S 精良	赤○ S 良好	良好	口縫部 1/2	第5層			
61 瓦 苔 上 茎	(30.6) 門徑(40.8)	(30.6) 外観：口縫部3条の段。口縫部から右 側面部ヨコナナ。体部ケツメイ。 内面：口縫部ヨコナナ。体部横方向の ハケメ。	灰白色 〃	△ S 密	○ S 密		○ S 密				良好	口縫部 1/6					
			(18.2) 門徑(25.3)	外観：口縫部3条の段。口縫部から右 側面部ヨコナナ。体部ヘラブリズ。 内面：口縫部ヨコナナ。体部横方向の ハケメ。	灰色 褐色	△ S やや粗	○ S やや粗		△ S やや粗			良好	口縫部 1/10				
63 瓦 苔 裸	(28.6) 門徑(34.4)	(28.6) 外観：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。体 部水平方向のタタキ。 内面：口縫部ヨコナナ。底部水平、体 部左上がりのハケメ。	灰色 〃	△ S 密	○ S 密		△ S 密				良好	口縫部 1/8	第4層				
			(32.4) 門徑(40.6)	外観：口縫部ヨコナナ。底部ナデ。体 部水平方向のタタキ。 内面：口縫部ヨコナナ。底部半扭曲 圧形成後ナデ、以卜水平方向のハケメ。	灰色 〃	○ S やや粗	○ S やや粗		▲ L やや粗			良好	口縫部 1/6				
65 五 瓦 苔 浅 株	(43.0) 門徑(47.0)	(43.0) 外観：口縫部ヘラミガキ。表面花文のス タンブ。 内面：口縫部ヨコナナ、以下ナデ。	褐色 〃	△ S 密	△ S 密	△ S 密	△ S 密				良好	口縫部 1/8	第5層				
			(43.2) 門徑(47.2)	外観：口縫部から体部ヨコナナ。 内面：口縫部ヨコナナ、以卜ナデ。	灰色 〃	▲ S 密	○ S 密		△ S 密			良好	口縫部 1/8				
67 植 根 器 絲	(24.0) 門徑(27.0)	(24.0) 外観：口縫部から体部上半回転ナデ。 内面：口縫部ヨコナナ。体部回転ナデ。口縫部暗灰色 〃	灰色 〃	▲ S 密	△ S 密						堅強	口縫部 1/12	重複系 口縫部 外表面ねじれき裂				
			(27.0) 門徑(30.0)	外観：口縫部から体部回転ナデ。 内面：口縫部から体部回転ナデ。口縫部暗灰色 〃	灰色 〃	精 良	△ S 精良				堅強	口縫部 1/16	第4層				
69 瓦 苔 株	11.6 2.7	外観：口縫部ヨコナナ、以下指頭凹窓。 内面：口縫部ヨコナナ。体部ナデ。体 部に纏状附着。	灰白色~灰色 〃	△ S やや粗	△ S やや粗		▲ S やや粗				良好	1/2	外表面ねじれき裂				
			(11.6) 2.9	外観：口縫部ヨコナナ。体部指頭凹窓。 内面：口縫部から体部ナデ。	灰色 灰白色	△ S やや粗	○ S やや粗				良好	1/4	第5層 外表面ねじれき裂				
70 瓦 苔 裸																	

## 第3章 まとめ

今回の調査では、小面積にも拘らず平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期・室町時代中期・近世に比定される遺構・遺物を検出した。

平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期に比定される遺構については、概ね調査区の北部で検出されている。なかでも、鎌倉時代前期～中期に比定される遺構については、自然河川（N R-201）の流路に規制されて構築されたものである可能性が高い。ただ、時期的には連続性を持つものではなく、単発的な土地利用が断続して行われたことが窺える。

平安時代末期のものとしては、調査区の北部で溝1条（S D-202）を検出したのみで、包含層からもこの時期に比定される遺物は少量出土したにすぎない。鎌倉時代前期のものは上坑1基（S K-201）があり、N R-201に隣接する位置に構築されている関係から両者の有機的関係が想定される。鎌倉時代中期のものとしては、溝1条（S D-201）があり、N R-201からの引水の役割を果たした遺構であったと考えられる。なお、調査区の北西約350m地点で昭和56年～昭和59年に近畿自動車道路建設に伴って（財）大阪文化財センターにより実施された佐堂（その1）の調査においては、当該時期の集落が確認されており、中世時期の長瀬川右岸の自然堤防上に展開した集落の広がりが想定される。

室町時代中期の遺構は、北部から南部に広がっており、前代に比して集落の拡大傾向が認められるものの、居住域の中核を成す建物は検出されておらず不明な点が多い。この時期の集落は、調査地の北方約120mにある杵築神社ならびに「佐堂狐塚」から想定される神宮寺の存在や、東方約350mに存在した千眼寺（穴太庵寺）との関係から、これらの寺社に付随した集落であったと考えられる。

近世の遺構としては、井戸ならびに土坑を検出している。これらの遺構群は耕作上である第2a層（一部第4層）上面を構築面にしていることから、概ね農耕に関連した遺構群と推定され、当該期においては、当地が生産域として利用されていたことが推定される。

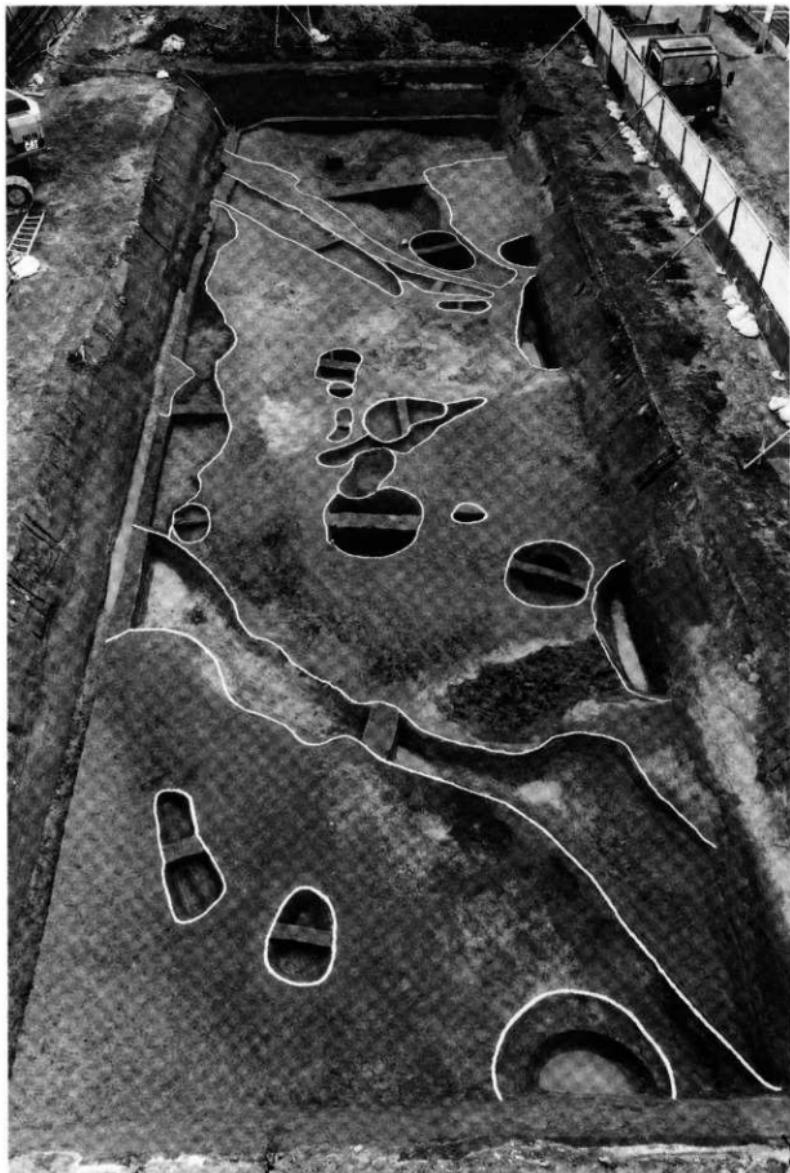
なお、これまでに佐堂遺跡内で実施された発掘調査としては、一部の小規模な調査を除けば、近畿自動車道建設に関連したものが唯一であった。周辺地域においても、東方の宮町遺跡範囲に存在する千眼寺（穴太庵寺）周辺で実施された調査成果が知られている程度で、考古学的成果の蓄積が少ない地域であった。今回、発掘調査を実施した地点（佐堂町1丁目）は、前述の既往調査地のほぼ中間地点に位置しており、今回の調査成果が本遺跡ならびに、東接する宮町遺跡の当該期の集落推移を推定するうえで一助となろう。

### 註記

- 註1 二宅正浩 1985『佐堂（その1）』（財）大阪文化財センター  
中井真大・阪田育功他 1984『佐堂（その2）-I』（財）大阪文化財センター  
中西晴人・森尾直樹他 1985『佐堂（その2）-II』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- 註2 柳橋利光 1987『新版八尾の史跡』八尾市長公室広報課・八尾郷土文化研究会  
なお、註文献によれば、「佐堂狐山」は杵築神社の後方にあった小さな塚状の地にあたり、宮寺の土壇の跡と考えられている。ここには、元龜元年（1570）銘のある墓碑が残されている。

- 註3 米田敏幸他 1982「宮町遺跡－昭和55・56年度埋蔵文化財調査年報」『八尾市文化財調査報告』八尾市教育委員会  
原田昌則・成海佳子 1983「第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告3』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註4 原田昌則 1993「第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会  
坪田貞一 1995「II宮町遺跡（第1次調査）」「(財)八尾市文化財調査研究会報告45』(財)八尾市文化財調査研究会

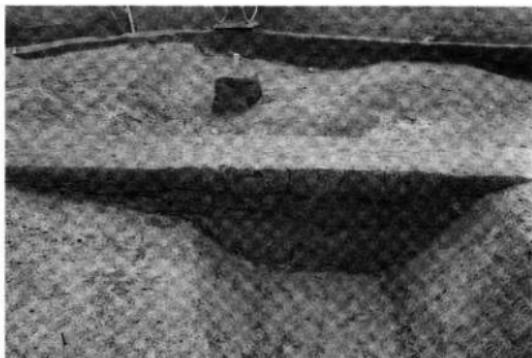
図 版



調査区全景（南から）



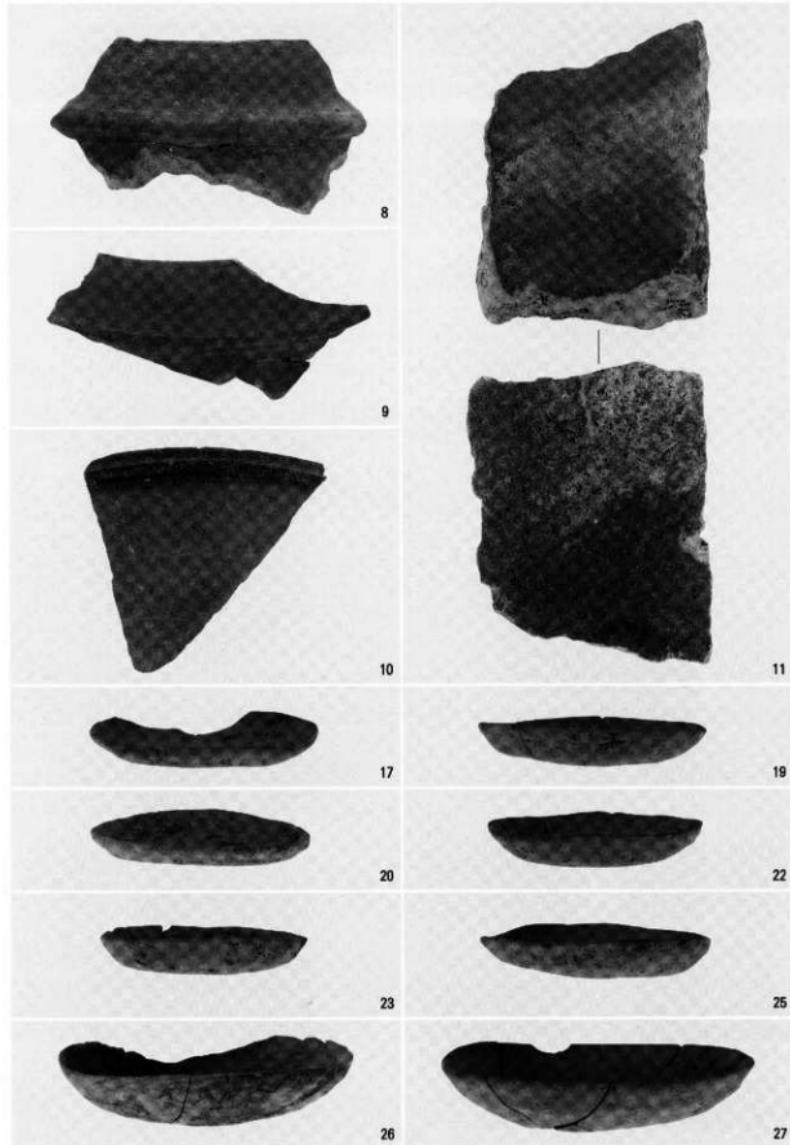
SK-201断面（南から）



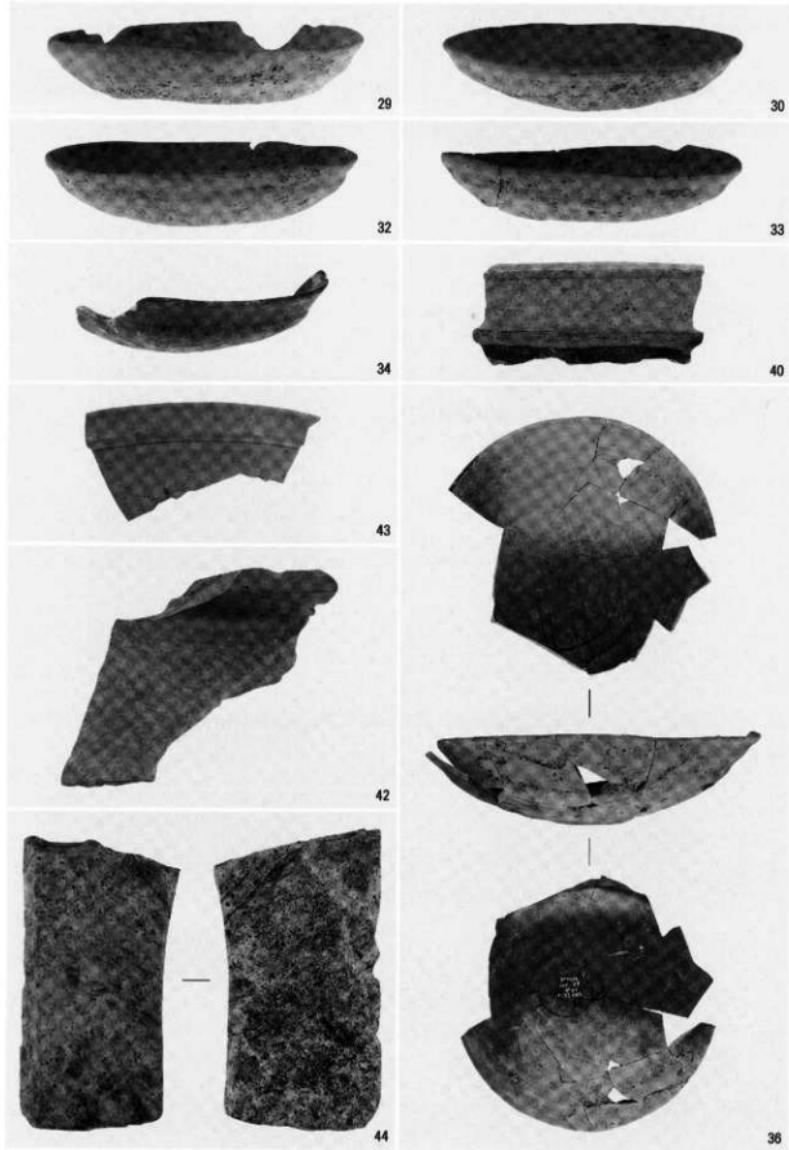
SD-201断面（南から）



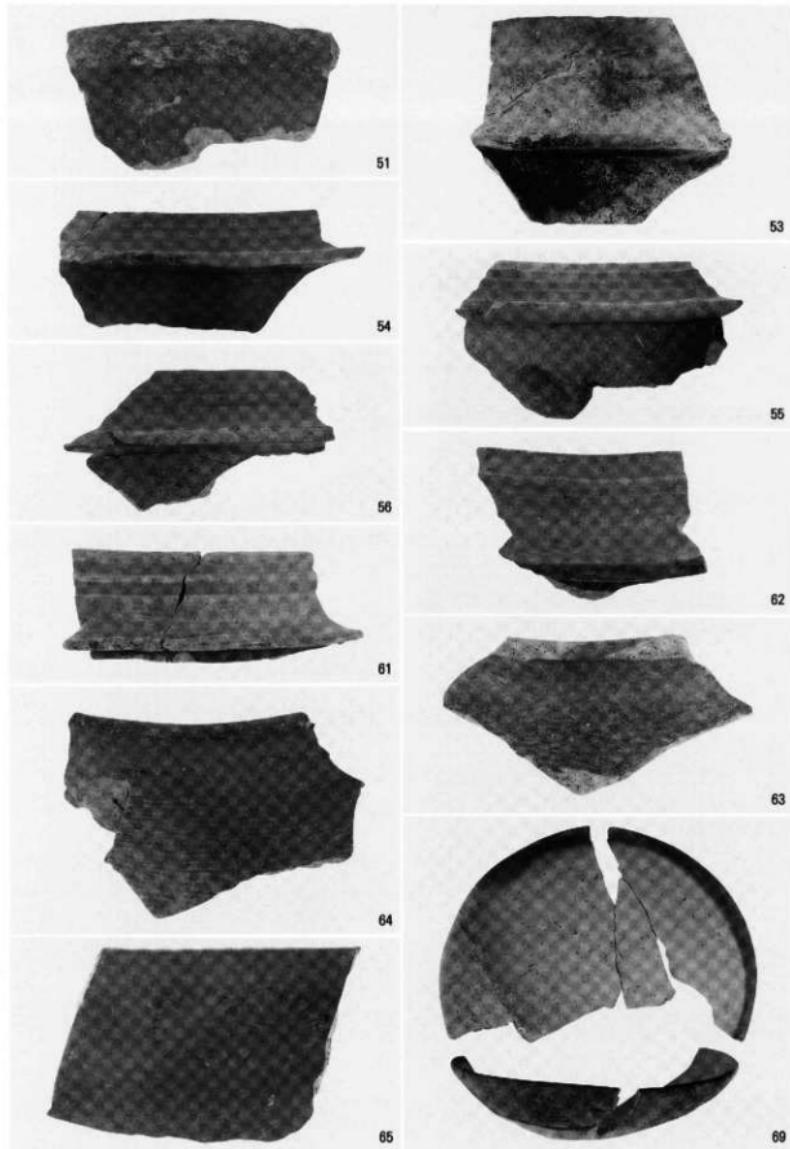
SD-207断面（東から）



SK-201 (8~11)、SD-201 (17~27) 出土遺物



S D - 201 (29・30・32~34・36・40・42~44) 出土遺物



SD-205 (51)、SD-206 (53~55)、SD-207 (56)、第4層 (63・64・69)、第5層 (61・62・65) 出土遺物

V 太子堂遺跡第7次調査（TS97-7）

## 例　　言

1. 本書は、八尾市太子堂1丁目地内で実施した公共下水道（9-30工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太子堂遺跡第7次調査（TS97-7）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋497-3号 平成10年1月30日）に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年3月2日から平成10年4月20日（実働13日）にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は94m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては市森千恵子、岡部和志、中西明美、松本貴匡が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西村・中西、図面レイアウト・トレース－中西・西村が行った。
1. 第7次調査地と第8次調査地は近接して調査を行っているため、調査地周辺図は第7次調査報告に記載し、第8次調査報告では省略した。
1. 本書の執筆、編集は西村が行った。

## 本　文　目　次

第1章 はじめに.....	59
第2章 調査概要.....	60
第1節 調査の方法と経過.....	60
第2節 検出遺構と出土遺物.....	60
第3節 出土遺物観察表.....	70
第3章 まとめ.....	73

## 挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	59
第2図 調査地位図	61
第3図 2区1層(1~3)、2区SD-201(4)、3区SK-301(5~8)、4区4層(9~20)、4区SP-401(21~23)、5区SD-501(24~25)、7区4層(26~27)、7区7層(28)、7区SP-701(29)出土遺物実測図	63
第4図 1区~5区平断面図	64
第5図 6区~10区平断面図	65
第6図 11区~13区平断面図	68
第7図 8区4層(30~31) 8区SD-801(32~33) 9区SE-901(34~43) 10区3層(44) 12区(45~47) 12区SK-1201(48~50) 13区2層(51)出土遺物実測図	69

## 図 版 目 次

図版一 1区全景(南から) 2区全景(南から)  
3区調査状況(南から) 3区全景(南から)  
4区全景(南から) 5区全景(南から)

図版二 調査地周辺および6区掘削状況 6区全景(西から)  
7区全景(南から) 8区全景(南から)  
9区全景およびSE-901内遺物出土状況(南から) 10区全景(南から)

図版三 11区全景(南から) 12区全景(南から)  
13区全景(南から) 13区下層掘削状況(南東から)  
2区1層(3) 3区SK-301(5~8)山上遺物

図版四 4区4層(9~16・18~20) 4区SP-401(23) 8区4層(30~31)出土遺物

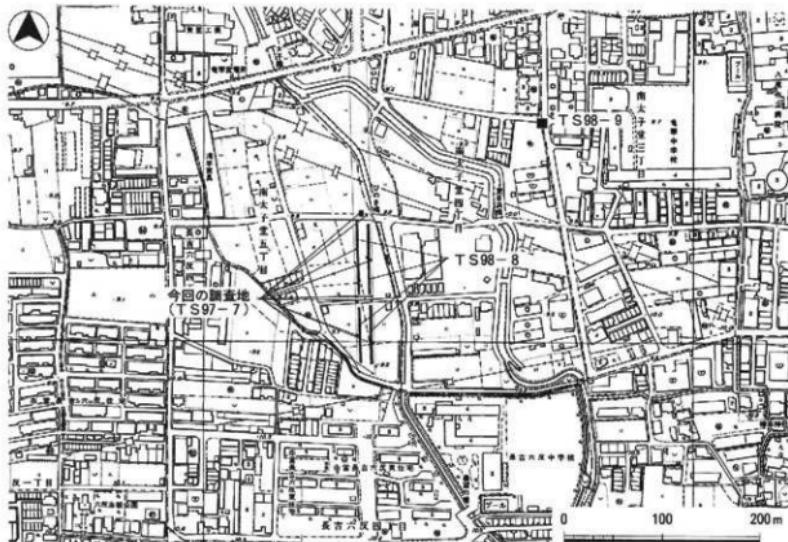
図版五 8区SD-801(32~33) 9区SE-901(41~43)  
12区SK-1201(48~50)出土遺物

## 第1章 はじめに

太子堂遺跡は八尾市の南西部にあたり、現在の行政区画では太子堂3～5丁目、東太子2丁目、南太子堂1～6丁目とその範囲としている。地理的には、旧大和川の支流であった平野川の自然堤防上に位置する古墳時代前期から近世にかけての複合遺跡である。当遺跡周辺には、北に跡部遺跡、北西に龜井遺跡、東に植松南遺跡、北東に植松遺跡が存在している。

当遺跡内では昭和58年度～平成10年度までに当調査研究会が9次におよぶ発掘調査を実施しており、古墳時代前期～室町時代にかけての遺構・遺物が確認されている。なかでも、当遺跡内の北東部に位置している第1次調査地では、奈良時代の遺構・遺物が多く検出されている。また、第2次調査では古墳時代前期の遺物が多量に出土した溝を検出している。

今回の調査地は当遺跡範囲の南部に位置し、道路を挟んだ南側は大阪市の長吉六反4丁目に接している。調査地の周辺では、当地より西部へ約300～500mの付近で（財）大阪文化財センターが昭和54年度～昭和61年度にかけて近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査を断続的に行っており、弥生時代～近世の遺構・遺物が多数出土されている。北東部へ約200～400m付近では大阪府教育委員会が昭和53年度から断続的に行なわれている平野川河川改修工事に伴う発掘調査から弥生時代中期の遺構・遺物を検出されている。さらに当地西侧の道路を挟んだ西部（約100～200m）付近の大阪市域である長吉出戸7丁目・長吉六反1丁目地内で（財）大阪市文化財協会が平成8年度に長吉東部地区区画整理事業に伴う発掘調査を行い、古墳時代後期～飛鳥時代に



第1図 調査地周辺図

かけての遺構・遺物が検出されている。

なお、第8次調査地は道路建設工事に伴い実施した調査で、第7次調査地とは近接している。

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道（9-30T区）工事に伴う発掘調査である。人孔11箇所（1区～11区）および立坑2箇所（12区・13区）の調査を実施した。

掘削に際しては、現地表下約0.6～0.8m前後までを機械掘削した後、以下0.2～0.5m前後については人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、現地表下0.6～1.2m前後で平安時代前期から後期の遺物包含層および遺構を検出した。以下調査区毎に検出遺構と出土遺物を記載する。

### 第2節 検出遺構と出土遺物

#### 1区

今回の調査地の南西側に位置する調査区である。盛土の層厚は0.7mで、現地表面はT.P.+10.0mを測る。その下には水田耕作土が存在していた。以下粘土層が3枚堆積していることが判明したが、どの層からも遺物や遺構の検出はなかった。第5層の上面（T.P.+8.8m前後）は攪拌をうけ土壤化している層である。この層の上面で調査を行ったが遺構の検出はなかった。しかし他の調査区の層から推測すると平安時代頃の土壤化層と推定される。以下粘土層を3枚確認したが遺構の検出や遺物の出土はなかった。

#### 2区

1区の北側約38mの地点の調査区である。現状は水田になっている場所で、現地表面はT.P.+9.4mを測る。第0層が現在の水田耕作土である。第2層以下第6層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第7層上面（T.P.+8.5m前後）は土壤化を受けている層で、上面で平安時代後期の溝1条（SD-201）を検出した。第8層以下には粘土層が堆積していたが遺構の検出はなかった。第10層内には細砂のブロックが混入し、亀裂が入っている場所を1箇所確認した。この細砂の部分について第10層中で精査を行い平面的に見ると、幅2～5cm程度のおおよそ東西方向に走る亀裂を確認した。断面では吹き上がりの痕跡は1箇所確認し、この吹き上がりは第10層中で止まっていた。この細砂層は堆積状況から地震による噴砂ではないかと思われる。これを地震による現象とするならば、詳しい時期の特定はできないが、層序から平安時代以前に起こった地震によるものと推測できる。

第1層からは平安時代後期に比定できる土師器の中皿（1）、小皿（2）が出土した。第7層からは、TK47型式に比定できる須恵器の高杯（3）が出土した。（3）は外面に波状文を施す。

#### SD-201

南北方向に伸びる溝である。溝の西側は調査区の外にあり幅は不明であるが、検出した幅は1.1m以上を測り、深さ0.3mを測る。埋土は10YR4/4褐色粗砂混粘土で平安時代後期の瓦器の破片

や土師器の皿（4）が出土した。

### 3区

2区の北側約35mの地点の調査区である。現状は道路になっている場所で、現地表面はT.P.+10.1mを測る。第0層は盛土で、厚み0.6mを測る。第1層は旧耕作土である。第2層以下第4層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第5層上面(T.P.+9.0m前後)は土壤化しており、平安時代後期の土坑1基(SK-301)を検出した。以下第6層はシルト混微粒砂で、約0.3m以上堆積しており、この層は河川の堆積によるものと思われる。

### SK-301

土坑の北側は調査区外に至り平面の形状は不明である。検出した平面形状は三角形で、長径1.15m、短径1.0mを測る。断面の形状は底面に凹凸をもつ逆台形で、深さ0.35mを測る。埋土は7.5YR3/1黒褐色細砂混粘土で平安時代後期の土師器小皿（5）、須恵器壺（6）、黒色土器椀（7）、瓦器椀（8）が出土した。

### 4区

3区の北側約5mの地点の調査区である。現状は道路になっている場所で、現地表面はT.P.+10.3mを測る。第0層は盛土で、層厚0.8mを測る。第1層は旧耕作土である。第2層以下第4層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第4層からは土師器小皿（9～14）、



第2図 調査地位位置図

土師器中皿（15・16）、瓦器椀（17～20）が出土した。第5層上面（T.P.+8.9m前後）は土壤化しており、平安時代後期の小穴1個（S P-401）を検出した。

#### S P-401

検出した平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.6m、短径0.45mを測る。断面の形状は皿形で、深さは0.1mを測る。埋土は10YR5/1褐色細砂混粘土で、平安時代後期頃と思われる平瓦（23）、土師器小皿（21・22）が出土した。

#### 5区

4区の北側約45mの地点の調査区である。現状は畑になっている場所で、現地表面はT.P.+9.3mを測る。第0層は現在の畑の耕作土で、層厚0.2mを測る。層厚1層以下第3層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第4層上面は土壤化しており、上面（T.P.+8.6m前後）では平安時代後期の溝を1条（S D-501）を検出した。第5層の細粒シルトは層厚0.2m以上あり、流水堆積層である。

#### S D-501

南北方向に伸びる溝で、西側は調査区の外にあり幅は不明である。検出長1.1mで、検出した幅は0.7mである。断面形状は皿形で、深さ0.3mを測る。埋土は10YR4/6褐色シルト混粘土で、平安時代頃の黒色土器椀（24）、須恵器杯（25）が出土した。

#### 6区

1区の東側約14mの地点の調査区である。現地表面はT.P.+9.5mを測る。第0層は現在の水田の耕作土で、層厚0.15mを測る。第1層以下第4層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第5層上面（T.P.+8.8m前後）で平面精査を行い遺構の検出に努めたが遺構の検出はなかった。周囲の調査の状況から第5層上面は平安時代後期頃に相当すると思われる。以下（T.P.+8.7～8.1m前後まで）には第6層～第8層が堆積していた。これらの層は粘土で、各層からの遺構の検出はなかった。

#### 7区

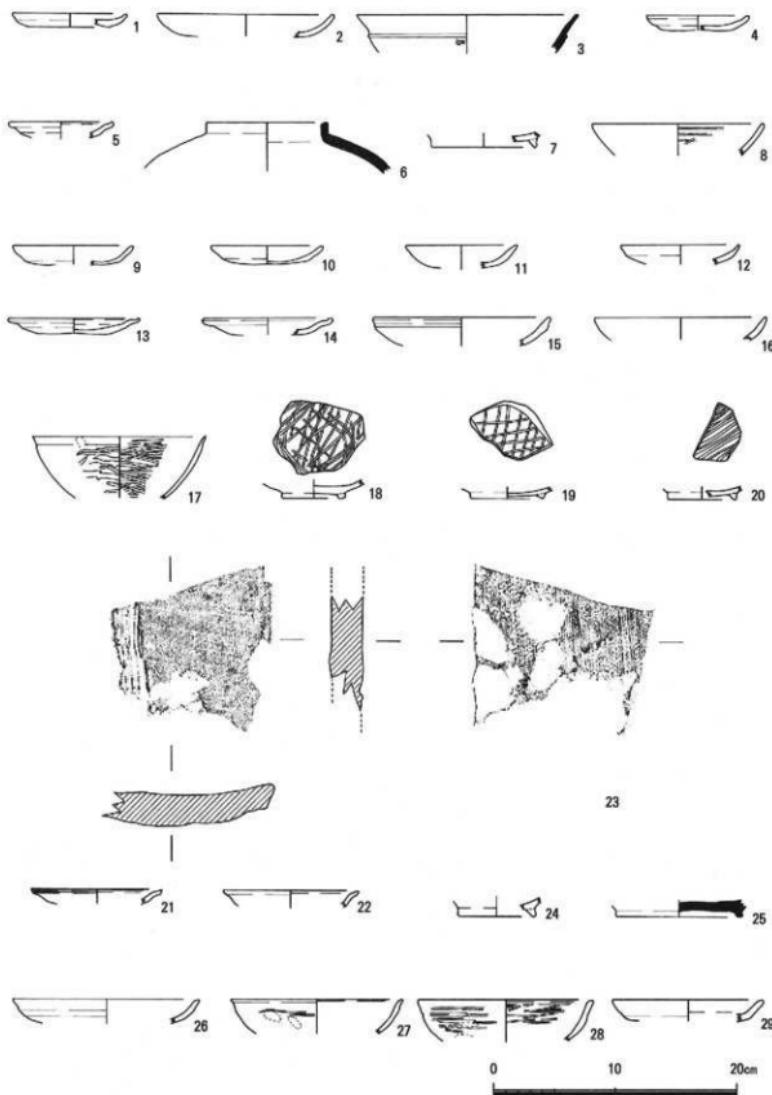
6区の北側約39mの地点の調査区である。現地表面はT.P.+9.4mを測る。第0層は現在の水田の耕作土で、層厚0.2mを測る。第1層以下第4層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第4層内には細かい土器片が多く含んでおり、この層は平安時代後期以後の整地層と思われる。第4層からは土師器小皿（26）、瓦器椀（27）が出土した。第5層上面（T.P.+8.45m前後）では平安時代後期の小穴を1個（S D-701）を検出した。第7層の細粒シルトは層厚0.2m以上あり、平安時代後期頃の瓦器椀（28）を含んでいる。この層は河川の堆積層と思われる。

#### S P-701

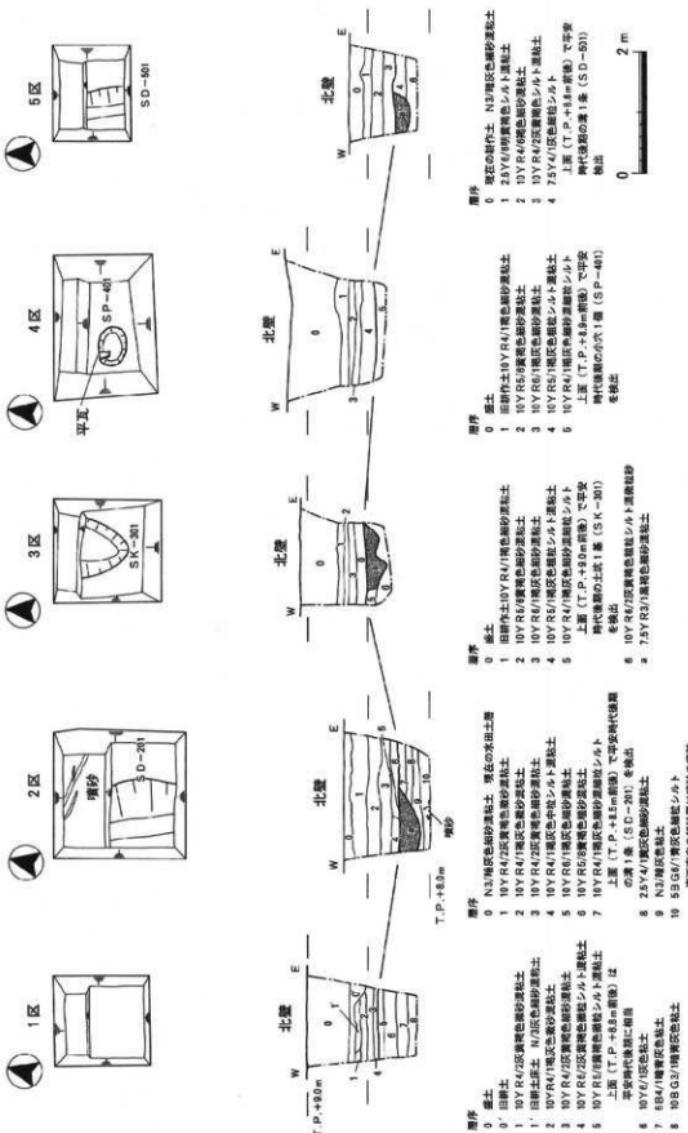
平面の形状は円形で、径0.6mを測り、断面の形状は皿形で、深さ0.2mを測る。埋土は2.5Y4/1黄灰色細砂混粘土で平安時代後期の土師器中皿（29）が出土した。

#### 8区

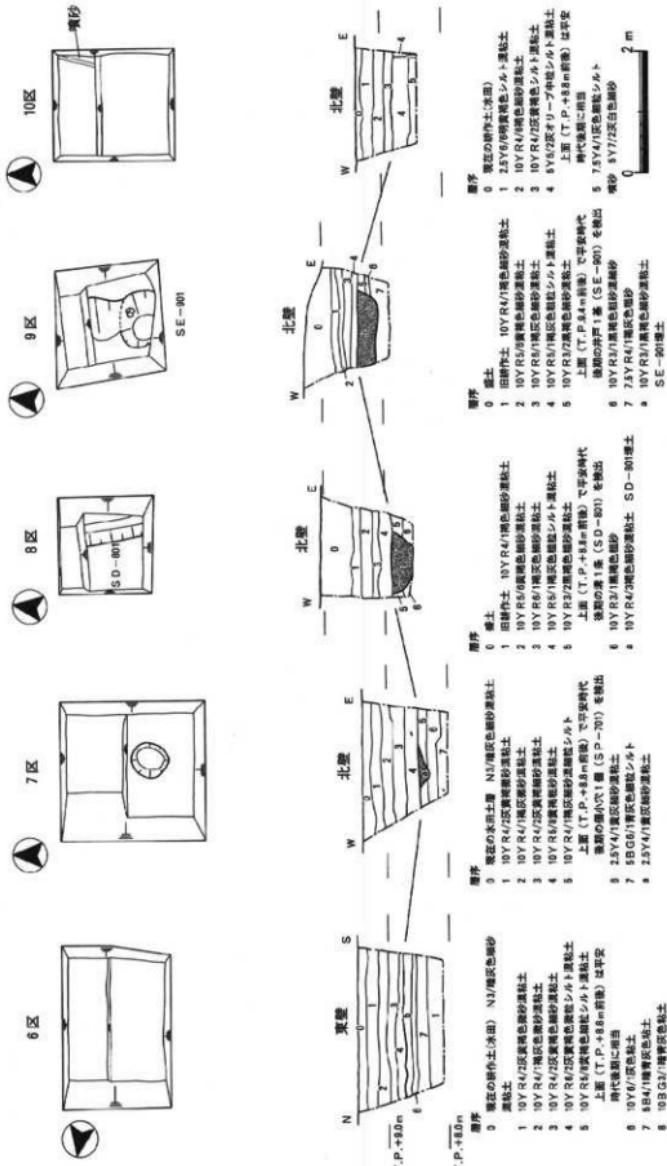
7区の北側約40mの地点の調査区である。現地表面はT.P.+10.1mを測る。第0層は現在の盛土上で、層厚0.55mを測る。第1層は旧耕作土で、層厚0.15mを測る。第2層以下第4層までは粘土層が堆積しており、遺構の検出はなかった。第4層からは土師器小皿（30）、白磁碗（31）が出土した。第5層上面（T.P.+8.8m前後）では平安時代後期の溝を1条（S D-801）を検出し



第3図 2区1層(1~3)、2区SD-201(4)、3区SK-301(5~8)、4区4層(9~20)、4区SP-401(21~23)、5区SD-501(24・25)、7区4層(26・27)、7区7層(28)、7区SP-701(29)出土遺物実測図



第4図 1区～5区平断面図



た。第6層の粗砂は層厚0.15m以上あり、この層は河川の堆積層と思われる。

#### 溝 (S D)

##### S D - 801

南北方向に伸びる溝で、東肩は調査区外にあるため幅は不明であるが、調査地内の北側でやや西に曲がっている。検出長1.3mで、検出した幅は1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.35mを測る。埋土は10YR4/3褐色細砂混粘土で奈良時代～平安時代後期の須恵器杯蓋(32)、黒色土器碗(33)が出土した。

#### 9区

8区の北側約4mの地点の調査区である。現地表面はT.P.+10.1mを測る。第0層は現在の盛土で、層厚0.5mを測る。第1層は旧耕作土で、層厚0.15mを測る。第2層以下第4層までは粘土層が堆積しており、造構の検出はなかった。第5層上面(T.P.+9.4m前後)では平安時代後期の井戸1基(S E - 901)を検出した。第6層と第7層は細砂と粗砂で、この層は河川の堆積層と思われる。

#### 井戸 (S E)

##### S E - 901

平面の形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.95m、短径0.55mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.6mを測る。埋土は上からI層10YR3/1黒褐色細砂混粘土、II層10YR3/2黒褐色微砂混粘土、III層N3/暗灰色粘土で、I層内からは平安時代後期の土師器小皿(34～38)、土師器皿(39・40)、黒色上器碗(41)、瓦器碗(42・43)が出土した。

#### 10区

9区の北側約39mの地点の調査区である。現地表面はT.P.+9.4mを測る。第0層は現在の畑の耕作土で、層厚0.1mを測る。第1層以下第4層までは粘土層が堆積しており、第3層内からは土師器中皿(44)が出土した。第4層上面で調査を行ったが造構の検出はなかった。第5層はシルトで、この層は河川の堆積層と思われる。第5層と第4層を貫き、第4層上面まで達している南北方向に伸びる細砂層(5Y7/2灰白色細砂)を確認した。この細砂は、地震の際の噴砂と推定される。時期の決定は難しいが、この噴砂方向は2区で検出したものと異なっている。時期の決定は難しいがこの噴砂も平安時代以前に起こった地震によるものと思われる。

#### 11区

10区の北側約45m地点の調査区である。現地表面はT.P.+10.2mを測る。第0層は盛土で、層厚1.0mを測る。第1層以下第4層までは粘土層が堆積しており、第1層～第3層上面には造構はなかった。第4層上面で調査を行い上面で平安時代後期の小穴1個(S P - 1101)検出した。

#### 小穴 (S P)

##### S P - 1101

造構の西側と北側は調査区外にあり平面の形状は不明であるが、検出した平面の形状は隅丸方形で、長径0.4m以上、短径0.3m以上を測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.3mを測る。埋土は5YR4/1褐灰色細砂混粘土で、平安時代後期頃と思われる土師器の甕の破片が出土した。

#### 12区

3区の東側約3m地点の調査区である。現地表面はT.P.+10.6mを測る。第0層は盛土で、層

厚0.5mを測る。第1層以下第4層までは粘土層が堆積しており、第3層からは上師器中皿(45)、十師器羽釜(46)、瓦質三足釜(47)が出土した。第4層上面(T.P.+9.0m前後)で調査を行い平安時代後期の十坑1基(SK-1201)、小穴1個(SP-1201)検出した。第5層は厚さ約3.0mで、平安時代以前の河川の堆積層である。第6層は粘土層で、植物遺体を含む沼地の堆積と思われる。以下第7層と第8層も粘土で、遺構の検出はなかった。

#### 土坑(SK)

##### SK-1201

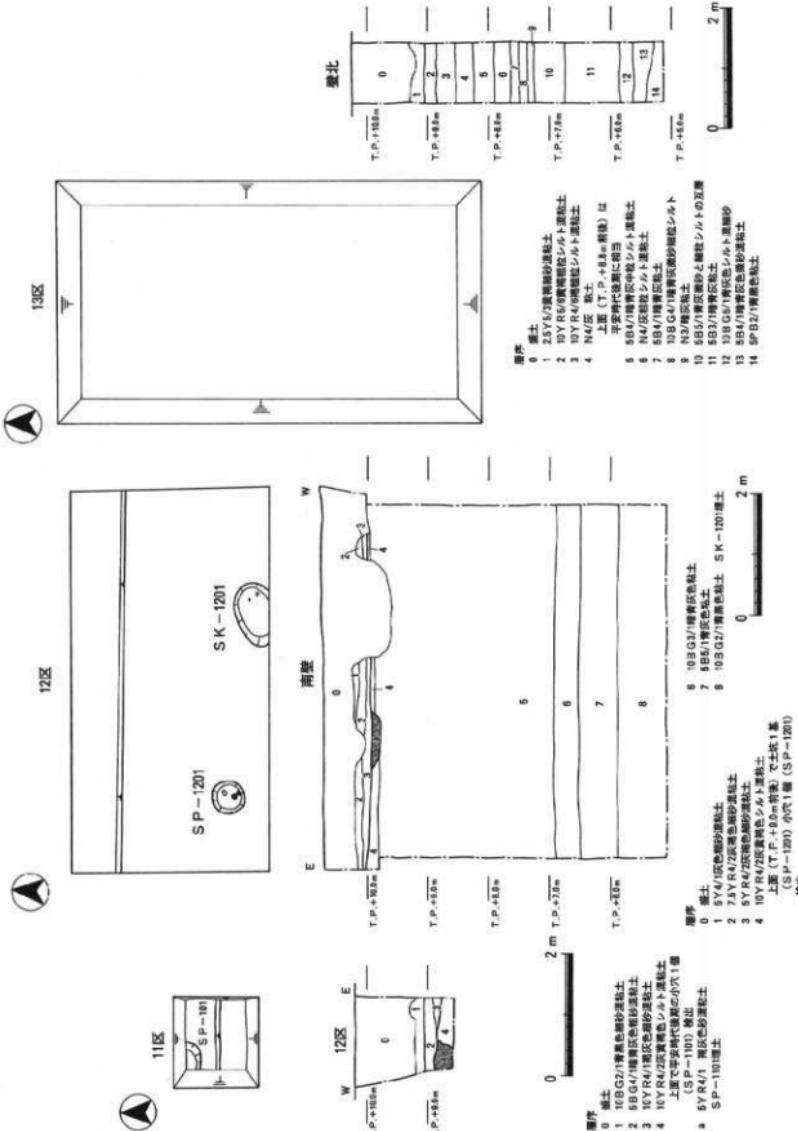
平面の形状は円形で、径1.0mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は10Y R3/4暗褐色細砂混粘土で、平安時代後期の上師器小皿(48・49)、土師器杯(50)および黒色土器が出土した。黒色土器は両黒で、器種は不明であるが平安時代後期のものと思われる。

##### SP-1201

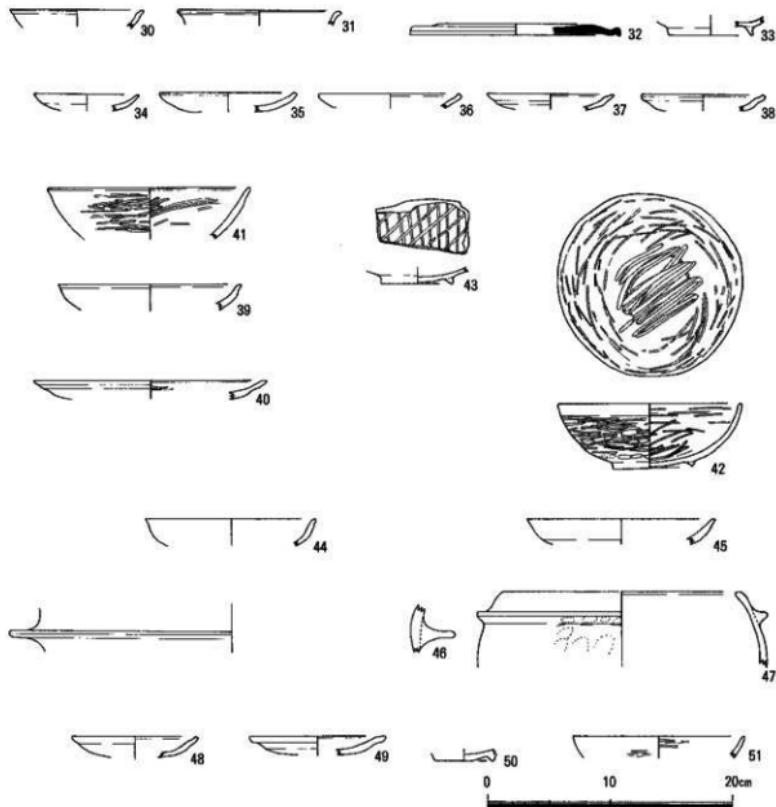
平面の形状は円形で、径0.5mを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10Y R4/2 灰黄褐色粗粒シルト混粘土で、平安時代後期の土師器の破片や瓦器碗の破片が出土した。破片で図化できなかったが、瓦器碗は器壁が厚く、外側にヘラミガキを施しているなどの特徴から平安時代後期に比定できる。

#### 13区

11区の西側約3m地点の調査区である。現地表面はT.P.+10.2mを測る。第0層は盛土で、層厚1.0mを測る。第1層以下第4層までは粘土層が堆積しており、第2層からは瓦器碗(51)が出土した。瓦器碗はやや薄い器壁で外側にヘラミガキを施していないもので、12世紀後半～13世紀代と思われる。第4層上面(T.P.+8.8m前後)で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。第4層上面(T.P.+8.8m前後)は平安時代後期に相当すると思われる。第11層は粘土層で、植物遺体を含む沼地の堆積と思われる。以下第14層も粘土で、植物遺体を含む沼地の堆積と思われる。



V 太子堂遺跡第7次調査 (T S 97-7)



第7図 8区4層(30・31)、8区SD-801(32・33)、9区SE-901(34・43)、10区3層(44)、12区3層(45~47)、12区SK-1201(48~50)、13区2層(51)出土遺物実測図

### 第3節 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種 出土位置	法量 (cm)	調整・技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1 一	土師器 小皿 2区1層	口径 9.2	上げ底の体部から上方に聞く口縫部。内外面ナデ。	外 にぶい黄褐色(10YR7/4) 内 にぶい黄褐色(10YR7/4) 断 にぶい黄褐色(10YR7/4)	精良	良好	
2 二	土師器 中皿 2区1層	口径 14.2	やや内溝しながら上方へ聞く口縫部。端部は丸く終わる。内外面ナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/6) 内 淡黄褐色(7.5YR8/4) 断 淡黄褐色(7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒を含む	良好	
3 三	須恵器 高杯 2区1層	口径 18.2	外内溝気味に聞く口縫部。外面に段がある。内外面回転ナデ。段より下に波状文を施す。	外 灰色(N5/) 内 灰色(N6/) 断 灰色(N6/)	密	良好	
4 四	土師器 皿 2区SD-201	口径 8.2	平らな底部からゆるやかに内溝し聞く口縫部。端部は尖り氣味に終わる。内外面ともにナデ。	外 黄褐色(2.5YR6/2) 内 黄褐色(2.5YR6/2) 断 黄褐色(2.5YR6/2)	粗	良好	
5 三	土師器 小皿 3区SK-301	口径 8.4	口縫部は外反し、端部を肥厚させる。口縫部内外面ナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/3) 内 淡黄褐色(7.5YR8/4) 断 淡黄褐色(7.5YR8/3)	精良	良好	
6 三	須恵器 蓋 3区SK-301	口径 9.8	内溝する体部から直立する口縫部。内外面回転ナデ。	外 青灰色(5PB8/1) 内 青青灰色(5PB4/1) 断 青灰色(5PB8/1)	精良	良好	
7 三	黒色土器 壺 3区SK-301	高台径 8.4 高台高 0.7	ハの字に聞く高台部。高台の断面形状は台形。内外面ナデ。	外 にぶい黄褐色(10YR7/3) 内 暗褐色(7.5YR7/6) 断 にぶい黄褐色(10YR7/3)	精良	良好	
8 二	瓦器 桶 3区SK-301	口径 14.0	上方へ内溝気味に聞く口縫部。端部は丸く終わる。内面へラミガキ。外側ナデ。	外 灰色(N5/) 内 灰色(N5/) 断 白灰色(5YR8/1)	3mmの砂粒含む	良好	
9 四	土師器 小皿 4区4層	口径 9.8	内溝気味に聞く口縫部。端部は丸い。内外面ナデ。	外 橙色(5YR7/6) 内 橙色(2.5YR7/8) 断 橙色(5YR7/6)	精良	良好	
10 四	土師器 小皿 4区4層	口径 9.0 器高 1.6	内溝気味に聞く口縫部。端部は丸い。内外面ナデ。	外 橙色(5YR7/6) 内 橙色(5YR7/6) 断 橙色(5YR7/6)	2mm以下の砂粒を含む	良好	
11 四	土師器 小皿 4区4層	口径 9.0	外反気味に聞く口縫部。端部は尖り氣味に終わる。内外面ナデ。	外 橙色(7.5YR6/6) 内 橙色(2.5YR6/6) 断 赤褐色(10R6/6)	2mm以下の砂粒を含む	良好	
12 四	土師器 小皿 4区4層	口径 9.6	体部から曲し上方へ聞く口縫部。端部は丸く終わる。内外面ナデ。	外 にぶい橙色(7.5YR7/4) 内 にぶい橙色(7.5YR7/4) 断 にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を含む	良好	
13 四	土師器 小皿 4区4層	口径 10.6 器高 1.2	口縫部は外反し、端部を肥厚させる。口縫部内外面ナデ。	外 灰白色(10YR8/2) 内 灰白色(10YR8/2) 断 灰白色(10YR8/2)	粗	良好	
14 四	土師器 小皿 4区4層	口径 10.2	口縫部は外反し、端部を肥厚させる。口縫部内外面ナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/3) 内 淡黄褐色(7.5YR8/3) 断 淡黄褐色(7.5YR8/3)	精良	良好	
15 四	土師器 中皿 4区4層	口径 14.4	やや内溝気味に聞く口縫部。端部は丸く終わる。口縫部外面には瓶広の凹状部分にくぼむ部分がある。内外面ともにナデ。	外 にぶい黄褐色(10YR7/4) 内 にぶい黄褐色(10YR7/4) 断 にぶい黄褐色(10YR7/4)	2mm以下の砂粒を含む	良好	
16 四	土師器 中皿 4区4層	口径 14.0	内溝する口縫部。端部は尖り氣味に終わる。内外面ともにナデ。	外 にぶい黄褐色(10YR7/4) 内 にぶい橙色(7.5YR7/4) 断 淡黄褐色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒を含む	良好	
17 四	瓦器 桶 4区4層	口径 14.2	やや内溝気味に体部から少しだけ外反する口縫部。端部は尖り氣味に終わる。内面へラミガキ。外側ナデ後ヘルミガキ。	外 灰色(N4/) 内 灰色(N5/) 断 白灰色(2.5YR7/1)	粗	良好	
18 四	瓦器 桶 4区4層	高台径 5.0 高台高 0.4	ハの字に聞く高台部。高台の断面形状は台形。外側ナデ。見込みは椅子のヘラミガキ。	外 灰色(N4/) 内 青黑色(5PB1.7/1) 断 灰白色(10YR8/2)	3mm以下の砂粒を含む	良好	
19 四	瓦器 桶 4区4層	高台径 5.8 高台高 0.5	ハの字に聞く高台部。高台の断面形状は三角形。外側ナデ。見込みは椅子のヘラミガキ。	外 灰色(N4/) 内 带灰色(N3/) 断 灰白色(2.5YR8/1)	精良	良好	

## V 太子堂遺跡第7次調査 (TS97-7)

遺物番号 図版番号	器種 出土位置	法量 (cm)	観察・技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
20 四	瓦器 鏡 4区4層	高台径 5.4 高台高 0.6	ハの字に聞く高台部。高台の断面形状は三角形。外回ナデ。見込みは平行のヘラミガキ。	外 灰色(N4/) 内 灰色(N4/) 断 灰白色(3.5YR7/1)	精良	良好	
21	上部器 小皿 4区SP-401	口徑 10.2	外反する口縁部。端部はやや横へつまる出し、口縁端部には凹縫状の深みがある。外回ナデ。	外 淡黄褐色(10YR8/3) 内 淡黄褐色(10YR8/4) 断 淡黄褐色(10YR8/3)	精良	良好	
22	土師器 小皿 4区SP-401	口徑 11.0	内湾気味に聞く体部から外反しややつまみ上げ、丸く終わる口縁部。外回ナデ。	外 淡黄褐色(10YR8/3) 内 灰白色(10YR8/2) 断 灰白色(10YR8/1)	精良	良好	
23 四	平皿 4区SP-401	厚み 2.8	凹面布目。一部布目の後ナデたため布目が消えている部分がある。凸面布目。側面ナデ。	外 灰色(N5/) 内 灰色(N5/) 断 灰白色(N7/)	3mm以下の砂粒を含む	良好	
24	黒色土器 碗 5区SD-501	高台径 6.0 高台高 0.7	内黒の黒色土器。ハの字に聞く高台部。内外面ナデ。	外 深褐色(10R6/8) 内 灰色(7.5Y4/1) 断 淡黄色(2.5Y7/4)	精良	良好	
25	須恵器 杯盤 5区SD-501	高台径 10.2 高台高 0.5	ハの字に聞く高台部。高台の断面形状は台形である。内外面回転ナデ。	外 灰色(N7/) 内 灰色(7.5Y5/1) 断 灰色(7.5Y5/1)	精良	良好	
26	土師器 中皿 7区4層	口徑 15.2	外反する口縁部。端部は丸い。内外ともにナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/4) 内 淡黄褐色(7.5YR8/4) 断 淡黄褐色(7.5YR8/4)	3mm以下の砂粒を含む	良好	
27	瓦器 鏡 7区4層	口徑 14.0	内湾気味に外へ聞く。口縁端部内面は沈線のうなぐぼみがある。内面ヘラミガキと思われるが焼長のため不明。外回ナデ後ヘラミガキ。	外 暗褐色(N3/) 内 暗褐色(N3/) 断 灰白色(2.5Y8/1)	2mm以下の砂粒を含む	良好	
28	瓦器 鏡 7区7層	口徑 14.2	内面機方向のヘラミガキ。外面指ナデ後機方向のヘラミガキ。	外 暗褐色(N3/) 内 オリーブ黒色(5Y3/1) 断 灰白褐(5Y8/1)	精良	良好	
29	土師器 小皿 7区SP-701	口徑 12.2	体部から削り、やや外反気味に聞く口縁部。内外面ともにナデ。	外 灰白色(2.5Y8/2) 内 灰白色(2.5Y8/2) 断 灰白色(2.5Y8/2)	3mm以下の砂粒を含む	良好	
30	土師器 小皿 8区4層	口徑 11.0	外反する口縁部。端部は尖り気味に終わる。内外面ともにナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/4) 内 淡黄褐色(7.5YR8/4) 断 淡黄褐色(7.5YR8/4)	粗	良好	
31 四	青磁 鏡 8区4層	口徑 13.0	外反気味に聞く口縁部。端部は外側に肥厚させ丸く終わる。内外面ともにナデ。	外 白灰色(10Y7/1) 内 白灰色(10Y7/1) 断 灰白色(5Y8/1)	精良(内外面ともに釉を塗る)	良好	
32	須恵器 杯蓋 5区SD-501	口徑 17.2	平らな蓋で、口縁端部は尖り気味に終わる。内外面ともに凹輪ナデ。	外 灰色(N4/) 内 灰色(N4/) 断 青灰色(5B5/1)	粗	良好	
33 五	黒色土器 碗 8区SD-501	高台径 6.8 高台高 0.7	ハの字に聞く高台部。高台部端面は丸い。内面ナデ。内黒の黒色土器。	外 棕色(5YR6/6) 内 黑色(10Y2/1) 断 棕色(5YR7/8)	粗	良好	
34	土師器 小皿 9区SE-901	口徑 8.6	体部から削りし口縁部はやや外反ぎみの口縁部である。端部は尖り気味に終わる。口縁部外面ナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/4) 内 淡黄褐色(7.5YR8/4) 断 淡黄褐色(7.5YR8/4)	粗	良好	
35	土師器 小皿 9区SE-901	口徑 11.4	口縁部は内削し、端部は丸く終わる。口縁部内外面ナデ。	外 淡黄褐色(10YR8/3) 内 淡黄褐色(10YR8/3) 断 淡赤褐色(2.5YH7/4)	粗	良好	
36	上部器 小皿 9区SE-901	口徑 11.8	口縁部は肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外 淡黄褐色(10YR8/3) 内 淡黄褐色(10YR8/3) 断 灰白色(10YR8/2)	粗	良好	
37	土師器 小皿 9区SK-901	口徑 10.4	口縁部は外反し、端部を肥厚させる。外回縁部内外面ナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/3) 内 淡黄褐色(7.5YR8/3) 断 灰白色(7.5YR8/2)	粗	良好	
38	上部器 小皿 9区SE-901	口徑 10.2	口縁部は外反し、端部を肥厚させる。外回縁部内外面ナデ。	外 淡黄褐色(7.5YR8/3) 内 淡黄褐色(7.5YR8/4) 断 淡黄褐色(7.5YR8/3)	粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種 出上位置	法盤(cm)	調整・技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
39 土師器 皿 9区SE-901	口径 15.0	口縁部はやや外反し、端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外 浅黄褐色(7.5YR8/4) 内 浅黄褐色(7.5YR8/4) 断 浅黄褐色(7.5YR8/4)	粗	良好		
40 土師器 皿 9区SE-901	口径 19.2	口縁部は上方に直線に伸び、端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外 浅黄褐色(10YR8/3) 内 浅黄褐色(10YR8/3) 断 浅黄褐色(10YR8/3)	粗	良好		
41 瓦器 桶 五 9区SE-901	口径 16.4	内湾気味の体部からやや外反する口縁部。端部は丸く終わる。内外面ともにヘラミガキ。口縁部内部は沈殿状にくぼむ。	外 喙灰色(N3/) 内 喙灰色(N3/) 断 黄灰色(3.5Y4/1)	精良	良好		
42 瓦器 桶 五 9区SE-901	口径 14.8 高台径 6.4 器高 5.4	内湾気味の体部。口縁部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ。体部内面にラミガキ。外側指捺で後へラミガキ。高台部はナグ。見込みに平行の暗文を施す。	外 喙灰色～灰褐色(N3/～N4/) 内 灰褐色～灰白色(N4/～N8/) 断 灰白色(N8/)	精良	良好		
43 瓦器 桶 五 9区SE-901	高台径 5.7 高台高 0.6	ハの字に開く高台部。外面はナデ。見込みに平行の暗文を施す。	外 灰色(N4/) 内 喙灰色(N3/) 断 灰白色(N8/)	精良	良好		
44 土師器 中皿 10区3層	口径 14.0	口縁部は体部から曲出し、外反気味に立ち上がる。端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外 棕色(5YR7/6) 内 にぼい褐色(5YH7/1) 断 にぼい褐色(5YH7/4)	粗	良好		
45 土師器 小皿 12区3層	口径 15.4	口縁部は外反気味に開き、端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面ナデ。	外 明褐色(7.5YR7/2) 内 浅黄褐色(7.5YR8/3) 断 灰白色(7.5YR8/2)	粗	良好		
46 土師器 羽釜 12区3層	口径 36.8	ほぼ水平方向に付く鈎。端部は丸く終わる。内面指ナデの痕跡が残る。外面ナデ。	外 明赤褐色(2.5YR6/6) 内 灰褐色(7.5YR4/2) 断 明赤褐色(2.5YR6/6)	粗	良好		
47 瓦質 三足並 12区3層	口径 19.2	内湾して伸び体部から口縁部に至る。やや丸みのある断面台形の鈎が付く。体部外面ナデで、指捺での痕跡が残る。内面・縁部はヨコナデ。	外 灰色(N4/) 内 灰色(N4/) 断 灰白色(2.5Y7/1)	粗	良好		
48 土師器 小皿 12区 SK-1201	口径 10.2	口縁部は外反し、端部は内側に若干肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外 灰白色(2.5Y8/2) 内 浅黄褐色(10YR8/3) 断 灰白色(2.5Y8/2)	精良	良好		
49 土師器 小皿 12区 SK-1201	口径 11.0	口縁部は外反し、端部は内側に若干肥厚させる。口縁部内外面ナデ。	外 浅黄褐色(7.5YR8/3) 内 浅黄褐色(7.5YR8/3) 断 灰白色(7.5Y8/2)	精良	良好		
50 土師器 杯 12区 SK-1201	高台径 4.8 高台高 0.6	高台部の断面は3角形。内外面ナデ。	外 棕色(5YR6/6) 内 棕色(5YR6/6) 断 棕色(2.5YR6/6)	2 mm以下の砂粒 を含む	良好		
51 瓦器 桶 13区2層	口径 14.0	内湾する体部。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味に終わる。内外面は粗織なラミガキ。	外 喙灰色(N3/) 内 喙灰色(N3/) 断 灰白色(2.5Y8/1)	精良	良好		

## 第3章　まとめ

今回の調査では、ほぼ調査地の全域で平安時代の包含層を検出した。また、4区や12区では小穴を検出し、さらに9区では井戸を検出していることから当時の集落が存在していた可能性を考えられる。

今回の調査地での2区と10区では平安時代後期以前に起こったと推定される地震の痕跡（噴砂）を検出した。同じ頃に起きたと推定される地震の痕跡（噴砂）は、今回の調査地の北約1.1kmでの久宝寺遺跡内で行った研究会第23次調査で検出している。このことから判断すると、今回の調査地周辺では、少なくとも平安時代後期以前に数回は地震があったと推測できる。

### 註

#### 註1

- ・岡田清一 1993『太子堂遺跡第1次調査・第2次調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告36
- ・坪田真一 1993『太子堂遺跡（第4次調査）』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』 跡部 小阪合 中田 美國 東郷 久宝寺 成法寺 竹渕 植松 太子堂 東弓削 田井中』財団法人八尾市文化財調査研究会報告39
- ・成海佳子・藤田道子 1997『VII太子堂遺跡（第3次調査）』『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・成海佳子 1997『VII太子堂遺跡（第6次調査）』『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告



図 版



1区全景（南から）



2区全景（南から）



3区調査状況（南から）



3区全景（南から）



4区全景（南から）



5区全景（南から）



調査地周辺および6区掘削状況（南から）



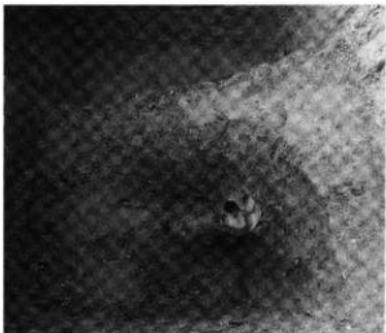
6区全景（西から）



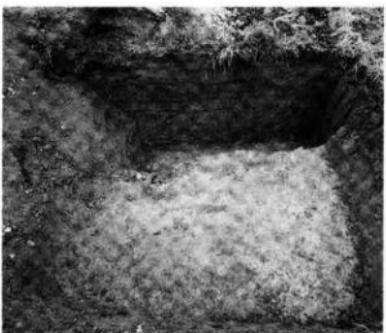
7区全景（南から）



8区全景（南から）



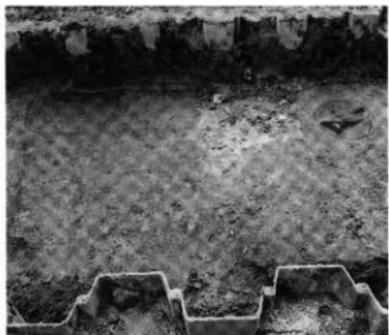
9区全景およびSE-901内遺物出土状況（南から）



10区全景（南から）



11区全景（南から）



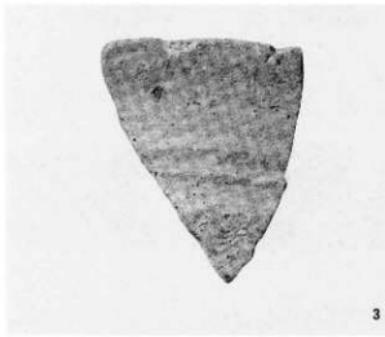
12区全景（南から）



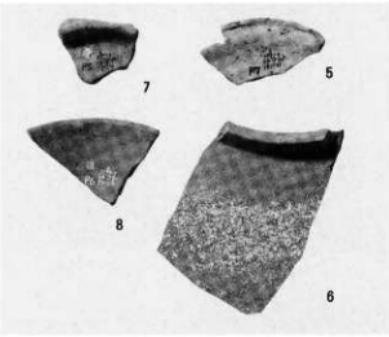
13区全景（南から）



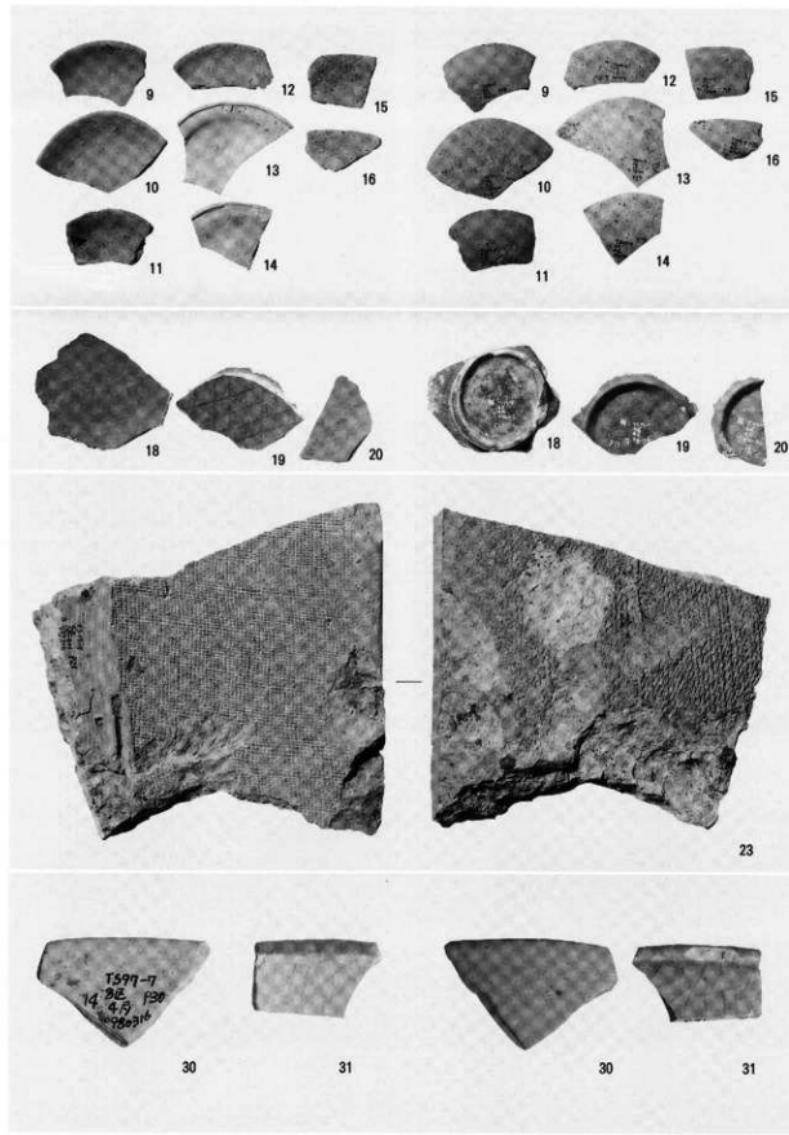
13区下層掘削状況（南東から）



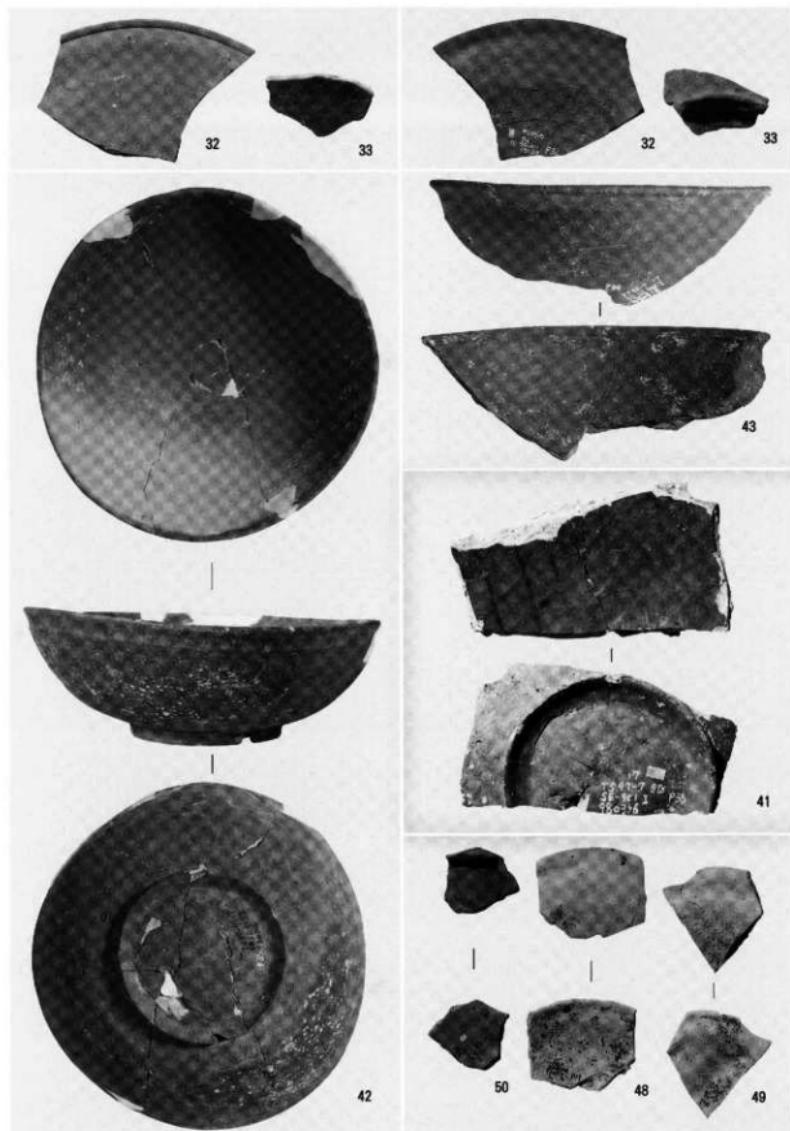
3



2区1層（3）3区SK-301（5～8）出土遺物



4区4層（9~16・18~20）4区SP-401（21）8区4層（30・31）出土遺物



8区 S D-801 (32・33) 9区 S E-901 (41~43) 12区 S K-1201 (48~50) 出土遺物

VI 太子堂遺跡第8次調査（T S 98-8）

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市太子堂1丁目地内で実施した道路築造工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太子堂遺跡第8次調査（TS98-8）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第564号 平成11年1月5日）に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成10年1月11日から2月5日（実働19日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は384m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては中西明美・西岡千恵子・市森千恵子・河本 清が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー田島和恵・沢村妙子が行った。
1. 第7次調査地と第8次調査地は近接して調査を行っているため、調査地周辺図は第7次調査報告に記載し、第8次調査報告では省略した。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

## 本 文 目 次

第1章 調査概要.....	75
第1節 調査の方法と経過.....	75
第2節 基本層序.....	75
第3節 検出遺構と出土遺物.....	78
第4節 山土遺物観察表.....	89
第2章 まとめ.....	93

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図及び区割り図.....	75
第2図 調査地断面柱状図.....	76
第3図 調査区遺構平面図.....	77
第4図 S E - 2 平断面図.....	78
第5図 1区A～C平断面図.....	80
第6図 1区S E - 2 • S D - 5 • S D - 10 • S O - 1 山土遺物実測図.....	81
第7図 1区遺構に伴わない山土遺物実測図.....	81
第8図 2区A～C平断面図.....	83
第9図 2区S D - 21 • 25 • 28 • 30出土遺物実測図.....	84

第10図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図	84
第11図	1J区断面図	85
第12図	3区遺構に伴わない出土遺物実測図	86
第13図	4区SD-29・30半断面図	87
第14図	SD-29出土遺物実測図	87
第15図	4区遺構に伴わない出土遺物実測図	88

## 表 目 次

第1表	1区溝一覧表	79
第2表	2区小穴一覧表	82
第3表	2区溝一覧表	83

## 図 版 目 次

図版 一	1区全景（南から）	1区SO-1（南から）	1区SE-1（東から）
	1区SE-2（東から）	1区SK-2（東から）	1区SD-2・3（南から）
	1区SD-6（東から）	1区SD-5（南から）	
図版 二	1区SD-1（東から）	1区SD-11（東から）	2区全景（南から）
	2区北部全景（北から）	2区SD-18（西から）	2区SK-3（東から）
	2区SP-3（西から）	2区SP-3断面（西から）	
図版 三	2区SD-16・17（東から）	2区SD-18（東から）	2区SD-25（南から）
	2区SD-20・21（東から）	2区SD-26（東から）	2区SD-27（北から）
	3区全景（北から）	3区全景（南から）	
図版 四	4区全景（北から）	4区北部（北から）	4区SD-30（南から）
	4区SD-29（南から）		
図版 五	出土遺物		
	4 SD-3	5 SO-1	
	7・9・10・13	1区遺構に伴わない出土遺物	
	22 SD-27		
	25・26・29・30・31	1区遺構に伴わない出土遺物	
	35	2区遺構に伴わない出土遺物	
図版 六	38・44	4区SD-29	
	46～52・54・56・59・61・63	4区遺構に伴わない出土遺物	

## 第1章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の調査は道路建設（久宝寺太田線の一部）工事に伴うものである。平成10年12月25日、八尾市教育委員会より、「現在、太子堂1丁目地内で道路建設の工事を中断させている。緊急に発掘調査を実施してほしい」との連絡があった。道路予定地はすでに道路の基礎部分が地盤改良され（遺跡埋没深度上面まで）、パラスが敷詰められている。道路境界の両端側はコンクリート壁、その内側沿いでは下水管路が埋設されており、市教委では道路敷と下水管路埋設の間を対象に調査区を設定した発掘調査を指示した。当調査研究会ではその指示書をもとに道路課と協議を行い、平成11年1月11日から発掘調査を実施することになった。調査地では現存する3本の道路が道路建設予定地を横断している。既設の道路下水道の管路部分と道路敷との間に上面幅1.5m前後の南北方向のトレンチを4本設定した（第2図）。それぞれの長さは第1区ー約75m、第2区ー約70m、第3区ー約56m、第4区ー約56mを測る。掘削の方法は市教委の遺構確認調査の結果および全掲第7次調査 (TS97-7) の調査成果を参考に、現地表 (T.P.+9.6m) 下約0.5~1.2mまでを機械掘削、以下0.2~0.5mを人力掘削として調査した。

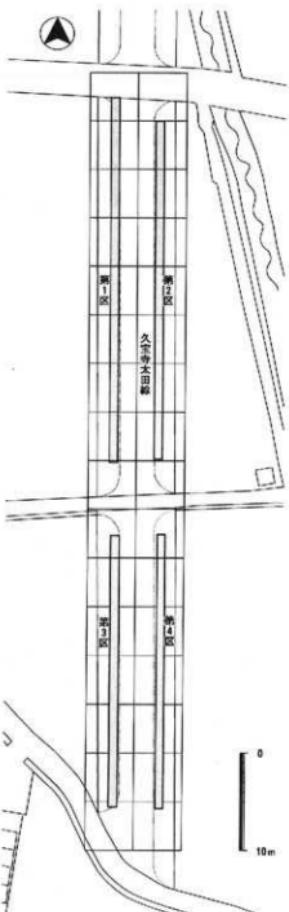
地区割りについては、道路センターのNo.8~No.15を基準点とし、調査区範囲を包括できる南北200m、東西20mに10m角の方眼を作成した。区名は北西角より南北軸は東へ1~2、東西軸は南へA~Pを付称（凡例1 A区）して遺構や遺物の取り上げなどの記録保存を行った。

### 第2節 基本層序

調査区は南北に長いトレンチであった。それらの地層で普遍的にみられる土層を抽出して基本層序とした。以下、各層について記す。

第1層 盛土（層厚20~60cm）。上面は道路工事による土盛りで、マサ土やパラスなどである。

道路中心部は土壤改良により堅くしまっている。現地表面は (T.P.+ ) 9.6m前後を測る。



第1図 調査区位置図および地区割り図

第2層 耕上（層厚0～15cm）。直前までの耕作土である。一部では削平されている部分がみられる。

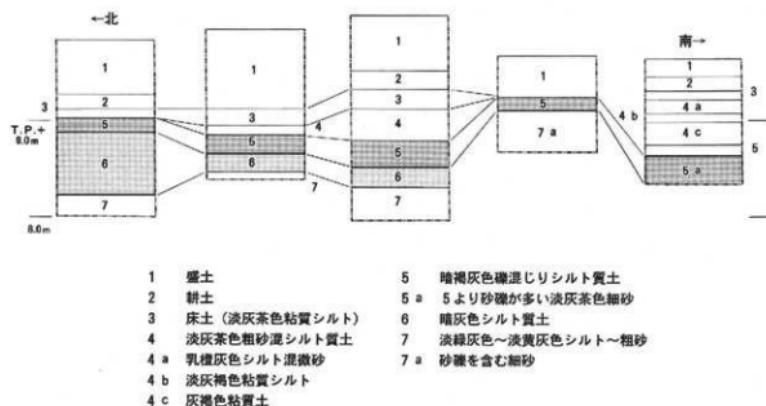
第3層 淡灰茶色粘質シルト（層厚0～20cm）。耕作土の床土である。

第4層 淡灰茶色粗砂混シルト質土（層厚20～40cm）。平安時代末～鎌倉時代の土層と考えられる。よくしまっており、整地層と思われる。第3区・第4区の南部で第4a層乳橙灰色シルト混微砂・第4b層淡灰褐色粘質シルト・第4c層灰褐色粘質土に分かれる。

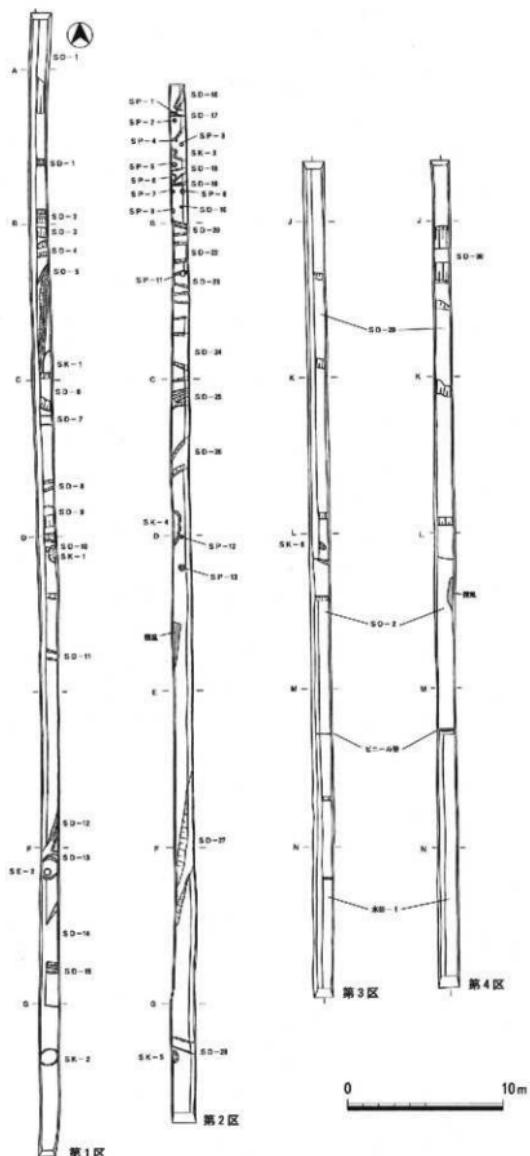
第5層 暗褐色疊混シルト質土（層厚10～20cm）。第5a層淡灰茶色細砂は調査区南部の水田土層上面付近に堆積する。

第6層 乳緑灰色～淡黄灰色シルト（層厚30cm）。褐色の斑点が多数みられる。奈良時代～平安時代前期の遺物を少量含む。

第7層 黄茶灰色粘質シルト～淡灰茶色シルト混細砂（層厚30cm以上）。奈良時代～平安時代前期のベース面と思われる。第7a層（砂礫を含む細砂）は調査区中央付近にみられる。



第2図 調査地断面模式図



第3図 調査区造構平面図

### 第3節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約0.5~1.5m（標高8.5~9.1m）の第4~6層で奈良時代~鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。検出遺構は第1区・井戸2基（SE-1・SE-2）、土坑1基（SK-1・SK-2）、溝15条（SD-1~SD-15）、落込み1箇所（SO-1）、第2区・土坑3基（SK-3~SK-5）、小穴14個（SP-1~SP-13）、溝13条（SD-16~SD-28）、第3区・溝1条（SD-29）、水田遺構1面（水田1）、第4区・溝2条（SD-30）である。遺物は遺構および包含層内からコンテナにして約8箱分を出土した。以下、検出した遺構について記す。

#### ・第1区

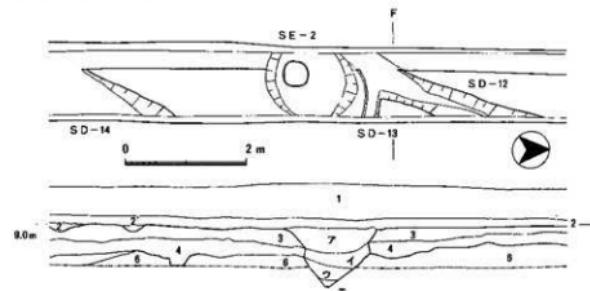
##### 井戸（SE）

###### SE-1

調査区中央付近（1E区）の東部で検出した。掘形の平面形状は検出部で半円形を呈し、径1.2m・深さ0.35mを測り、中央付近で方形に組み合せていると思われる井戸側の南半部を検出した。井戸側は板枠（幅10cm・長さ60cm・厚み0.8cm）1段で、一辺（西辺）0.6mを測る。埋土は掘形が暗褐色粗砂混粘土、明黄褐色細砂で、井戸側（方形の板枠）内は、暗灰色細砂混粘土である。内部（掘形）からは土師器の小片をごく少量出土しているが、時期を特定する遺物はない。掘り方の切り込まれている崩位から考えて平安時代末~鎌倉時代にかけてのものであろう。

###### SE-2

調査区南部（1G区）の北部で検出した。掘形の平面形状は円形で、径1.2m・深さ0.85mを測る。南西よりの底付近で井戸側に使用していた曲物（径35cm・高さ10cm・厚み0.5cm）1段を検出した。井戸側の曲物は3~4段を積み重ねていたものと思われるが、井戸廃棄時に上段部の曲物を抜き取ったものと考えられる。埋土は掘形が暗褐色粗砂混粘土、明黄褐色細砂で、井戸側（曲物）内は、暗灰色細砂混粘土である。内部（掘形）からは13世紀後半頃の瓦器碗、土師器小皿などの小片を出土している。図示できたものは井戸内山上の鉢？（1）1点である。鉢は口縁外間に断面台形の鋸が巡る。



1 盛土	4 淡灰茶色粗砂混シルト質土	ア 灰褐色細砂混粘土
2 耕土	5 暗褐色疊混じリシリット質土	イ 暗褐色細砂混粘土
2' 2で砂質土	6 暗灰色シルト質土	ウ 暗青灰色粘土
3 床土（淡灰茶色粘質シルト）		エ 暗青灰色粘土と淡黄灰色細砂のブロック

第4図 SE-2平面図

## 土坑 (SK)

## SK-1

1C区の南で検出した。径1.2mで平面ほぼ円形を呈する。深さは15cm前後で比較的浅いものである。埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は平安時代初頭ごろの土師器の小片をごく少量出土した。

## SK-2

1H区で検出した。径1.2mで平面ほぼ円形を呈し、深さは15cm前後を測る。埋土は焼土や炭を多く含む暗灰色砂質土である。遺物は平安時代後期以降の土師器・瓦器と西端で用途不明の鉄製品1点を検出した。

## 溝 (SD)

## SD-1 ~ SD-15

15条を検出した。南北方向に伸びる溝2条 (SD-5・SD-12) 以外はほぼ東西方向の溝である。遺物は土師器の小片がごく少量出土している。図示できたものはSD-10内から平安時代初頭の土師器の鉢(2)、SD-3内から平安時代前期以降の土師器の杯(3)と小皿(4)を2点である。2は楕状の体部で、内面はヘラミガキを施している。各溝については下表に示した。

第1表 第1区溝一覧表

単位はm

遺構番号	区名	方向	幅	深さ	断面形	堆積土	備考
SD-1	1B	東-西	0.4~0.5	0.30	逆台形	乳褐色シルト	
SD-2	1B	東-西	0.5	0.30	"	灰褐色微砂混シルト	
SD-3	1C	東-西	1.2~1.3	0.30	"	"	
SD-4	1C	東-西	0.8~1.0	0.30	"	"	
SD-5	1C	南-北	0.3~0.5	0.50	"	"	SD-6に切られる
SD-6	1C・D	東-西	2.2~2.4	0.40	"	"	中世
SD-7	1D	東-西	0.6	0.15	"	"	
SD-8	1D	東-西	0.6~0.7	0.25	"	"	
SD-9	1D・E	東-西	1.6~1.8	0.25	"	"	
SD-10	1E	東-西	0.8	0.30	"	"	SE-1に切られる
SD-11	1E	東-西	0.5~0.6	0.20	"	"	
SD-12	1F・G	南-北	0.5	0.20	"	暗灰色粘質土	SD-13と合流
SD-13	1G	東-西	0.12	0.20	"	"	SD-12と合流
SD-14	1G	東-西	2.0~4.0	0.20	"	淡茶灰色砂礫混シルト質土	
SD-15	1G	東-西	0.5	0.20	"	暗緑灰色砂礫混シルト質土	中世

## 落込み (SO)

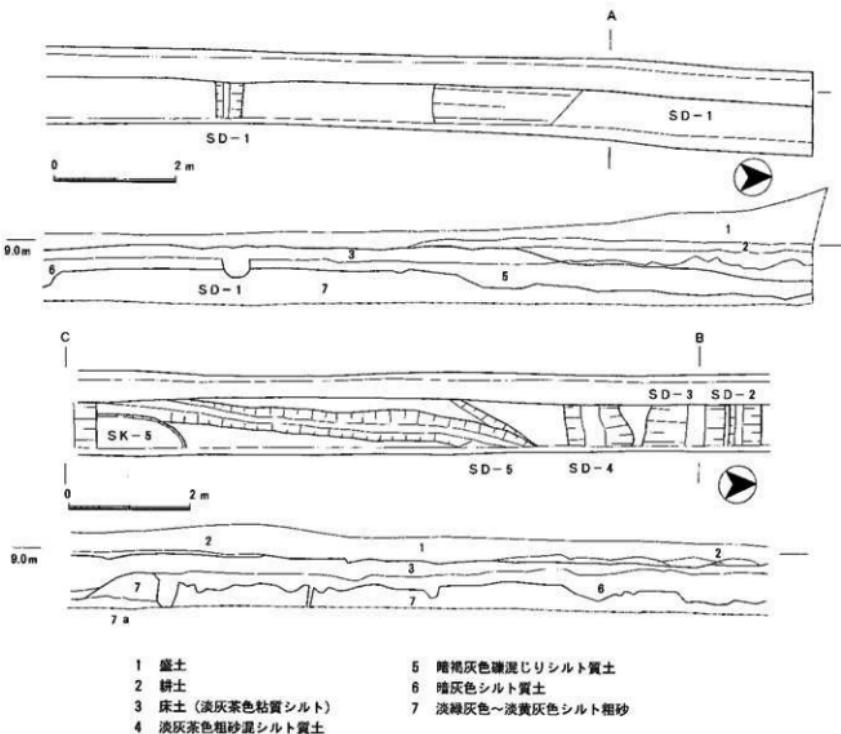
## SO-1

北部 (1A・B区) で検出した。北側へ行くにつれ低くなっている。東西ともに調査区外に至る。検出長6m以上、深さは深い所で約0.4mを測る。堆積土は暗緑灰色砂礫混シルト質土で古墳～平安時代前期の遺物を含む層である。山上量はごく少量で、図示できたものは2点 (5・6) である (第7図)。(5)は外反する口縁部の特徴をもつ7世紀代の土師器の羽釜、(6)は古墳時代前期に比定される土師器の甌で、畿内地方の特徴をもつ。

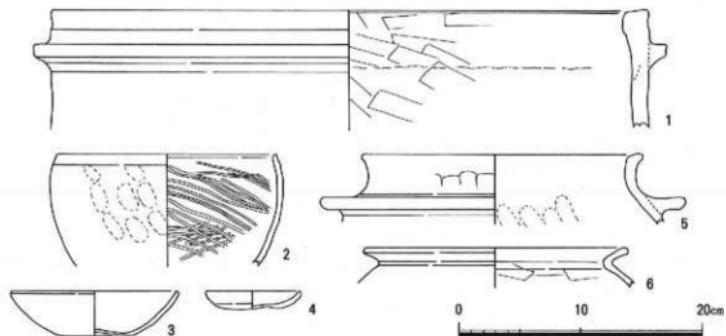
遺構に伴わない出土遺物

第5・6層で古墳時代前期～平安時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたもの

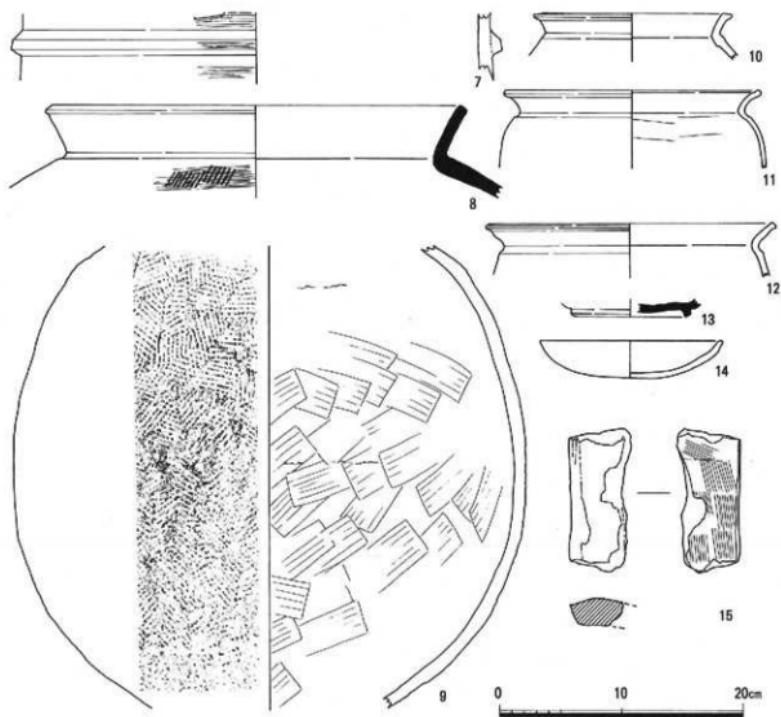
は9点(7~15)である(第8図)。(7)は円筒埴輪の破片である。しっかりとした断面台形のダカをもち、外面にはヨコハケが施されている。特徴から古墳時代中期前半ごろと思われる。(8)は須恵器の壺で、上外方へ直線的に伸びる口縁に面をもつ端部で、体部外面には平行タタキとカキ目が施されている。(9~12)は古墳時代後期の須恵器の壺である。(9)は休部片で外面には格子状のタタキがみられる。(10)は口縁部片でつまみ出しの端部に平らな面をもつ。(11)は外反する口縁で、端部はつまみ上げている。(12)は直線的に外方する口縁にやや肥厚気味の端部をもつものである。(13~15)は7~8世紀のもので、(13)は底部にしっかりとした断面逆台形の高台がつく須恵器の杯。(14)は断面皿状の比較的浅い土師器の杯である。(15)は移動式竈の焚き口の一部分で胎土内の砂粒の鉱物からみて生駒西麓産のものであろう。



第5図 1区A~C平断面図



第6図 1区SE-1・SD-5・SD-10・SO-1出土遺物実測図



第7図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図

・第2区

土坑（SK）

SK-3

2B区で検出した。南北2.0m、東西1.0m以上で東に広がりをもって調査区外に至る。深さは15cm前後で比較的浅いものである。埋土は焼土や炭を含む暗灰色砂質土で、底面で2個の小穴（SP-2・3）を検出しており、そのうちのSP-3の埋土には多量の焼土・炭が含まれていた。遺物は土師器・須恵器の小片がごく少量出土した。

SK-4

2C・D区の西壁付近で検出した。南北2.25mで、西部の調査区外に至る。深さは0.1m前後で比較的浅いものである。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は土師器の小片がごく少量出土した。

SK-5

2Hの西壁付近で検出した。南北0.8mで、西部の調査区外に至る。深さは12cm前後である。埋土は炭を含む暗灰色砂疊混砂質土である。遺物は土師器の小片がごく少量出土した。

小穴（SP）

SP-1～SP-13

第2区から14個を検出した。その大部分は北部（2B・C区）からである。平面形状はほぼ円形を呈するもので径0.15～0.4mを測る。深さは8～15cmで比較的浅いものが多いが、中には32cm前後の深いものもあった。特筆すべきものとしてはSK-3内より検出したSP-3は焼土や炭を多く含む埋土である。出土遺物では一部の小穴の埋土に土師器の小片がごく少量含まれる程度である。各小穴については下表に示した。

第2表 第2区小穴一覧表

※単位:m

遺構番号	区名	径	深さ	平面形	断面形	堆積土	備考
SP-1	2B	0.18	0.15	円形	逆台形	暗灰褐色シルト質土	
SP-2	2B	0.22	0.15	"	"	"	
SP-3	2B	0.10	0.08	"	"	"	SK-3底より
SP-4	2B	0.23	0.25	"	"	"	SK-3底より
SP-5	2B	0.30	0.10	"	"	"	
SP-6	2B	0.49	0.12	"	"	"	SD-18底より
SP-7	2B	0.26	0.22	—	"	"	
SP-8	2B	0.30	0.19	"	"	"	
SP-9	2B	0.38	0.32	—	"	"	
SP-10	2B	0.16	0.20	"	"	"	
SP-11	2C	0.38	0.10	"	"	"	SD-22底より
SP-12	2E	0.26	0.08	"	"	"	
SP-13	2E	0.38	0.14	"	"	"	

溝（SD）

SD-16～SP-28

12条を検出した。調査区の北部で検出した東西方向に伸びる溝である。東西ともに調査区外に至る。幅約0.4～0.5m、深さ約0.1mを測る。堆積土は灰褐色粘質シルトで、断面皿状形を呈する。遺物は平安時代末～鎌倉時代のものがごく少量出土した。図示できたものは7点（16～22）であ

る。SD-21から土師器の甕(16)、SD-25から土師器の甕(17)・平瓦(20)、SD-28から上師器の小皿(18)、瓦器の椀(19)、SD-27から土師器の甕(21)・瓦質の羽釜(22)が出土した。

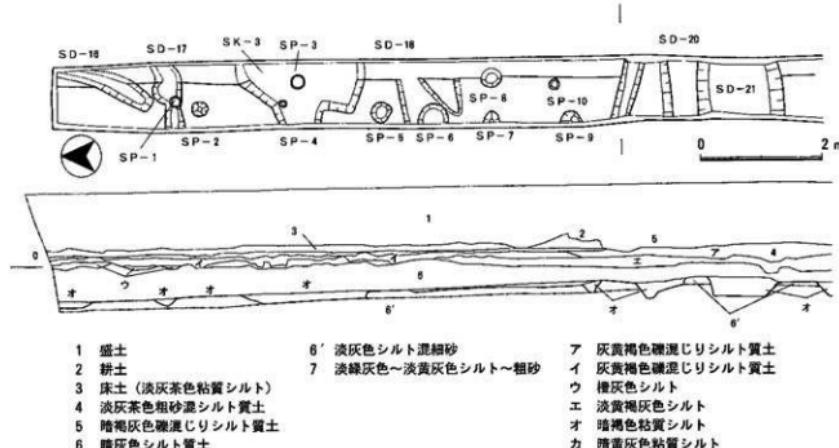
第3表 第2区溝一覧表

※単位はm

遺構番号	区名	方向	幅	深さ	断面形	堆積土	備考
SD-16	2B	東-西	0.40	0.15	逆台形	暗黃灰色粘質シルト	
SD-17	2B	東-西	0.20~0.45	0.12	"	"	
SD-18	2B	東-西	0.40~0.80	0.20	"	"	SD-18と合流
SD-19	2B	東-西	0.20	0.20	"	"	
SD-20	2B	東-西	0.30	0.20	"	"	
SD-21	2B	東-西	1.40	0.30	"	"	
SD-22	2C	東-西	0.70~1.10	0.20	"	"	
SD-23	2C	東-西	0.70	0.30	"	"	
SD-24	2C	東-西	2.00~2.40	0.35	"	"	
SD-25	2D	東-西	1.80~2.00	0.30	"	暗黃灰色粘質シルト	
SD-26	2D	東-西	1.40~2.00	0.25	"	"	
SD-27	2F・G	東-西	1.40~2.00	0.25	"	"	
SD-28	2H	東-西	1.40~2.00	0.25	"	"	

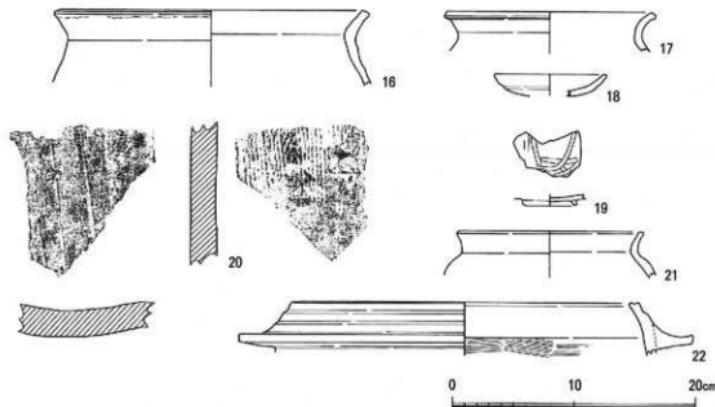
## 遺構に伴わない出土遺物

第6層内で古墳時代中期～鎌倉時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたものは9点(23～31)である(第11図)。(23)は土師器の皿である。口縁端部内面に沈線があり、その特徴から奈良時代前半ごろのものと思われる。(24)は土師器の杯で、(23)より新しい時期のものであろう。(25～27)は平安時代末～鎌倉時代の土師器の小皿である。(28・29)は瓦器の椀である。(28)はやや深めの椀で底部に断面逆三角形の高台が付き、内面の見込みに斜格子の暗文

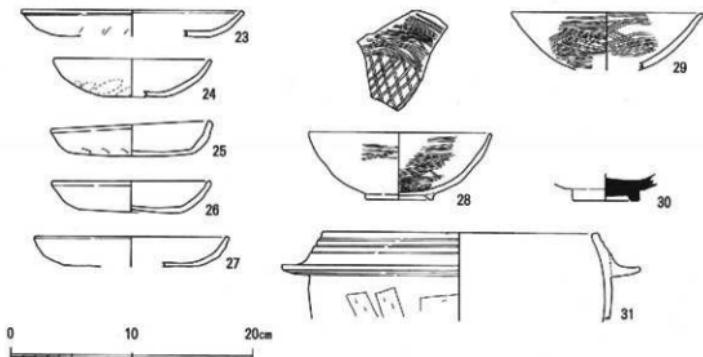


第8図 2区A～C平面断面図

が施されている。これらは和泉型と言われる特徴を持つ平安時代末の瓦器楕であろう。(30)は陶磁器の底部の破片で断面台形の高台が付く。内面に花柄文様を施している。(31)は瓦質の羽釜である。(30・31)は室町時代前半に比定されるものである。



第9図 2区 SD-21・SD-25・SD-28・SD-30出土遺物実測図



第10図 2区 遺構に伴わない出土遺物実測図

## ・第3区

## 土坑 (SK)

## SK-6

1M区で検出した。南北0.5mで平面楕円形を呈する。深さは0.3m前後である。埋土は淡灰色細砂である。遺物はなかった。

## 溝 (SD)

## SD-29

1K区で検出した東西方に伸びる溝で、東西ともに調査区外に至る。幅約5.0m前後、深さ約0.4m前後を測る。底面はフラットで、植物遺体が多量に含まれる粘土層がレンズ状に堆積している。この溝は第4区SD-29と同じ堆積土を呈しており、同一のものと思われ、長さ15mを測る。遺物は平安時代後期～鎌倉時代の土器・瓦器・瓦片がごく少量出土した。

## 落込み (SO)

## SO-2

1M・N区で検出した落込み状遺構である。東西ともに調査区外に至る。深さ約0.4～0.5mを測る。堆積土は砂礫を多く含む細砂に粘土がブロック状に入るもので、平安時代後期～鎌倉時代の土器・瓦器などを少量含んでいる。東部の第4区へ続いている。

## 水田

## 水田-1

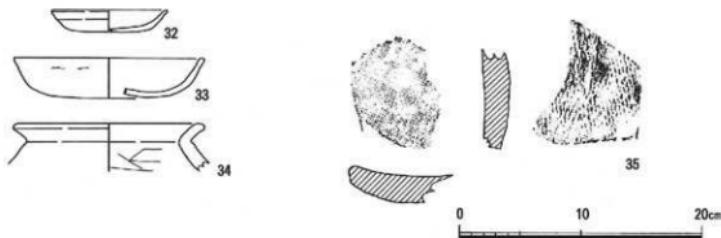
1O区で確認した。上面が細砂～微砂層で覆われた状態で粘着性のある粘土を検出した。粘土上面には畦畔や足跡状の痕跡はみられなかったが、調査区周辺の状況から水田上層と考えられる。東部の第4区でも同様に確認した。

## 遺構に伴わない出土遺物

第6層内で古墳時代前期～平安時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたものは4点(32～35)である(第13図)。(32～34)は土器である。(32)は小皿、(33)は中皿、(34)は甌である。(35)は半瓦で、凹面に布目、凸面に縄目がみられる。これらはすべて平安時代末～鎌倉時代初頭のものである。



第11図 1J区断面図



第12図 3区 遺構に伴わない出土遺物実測図

・第4区

溝(SD)

SD-29

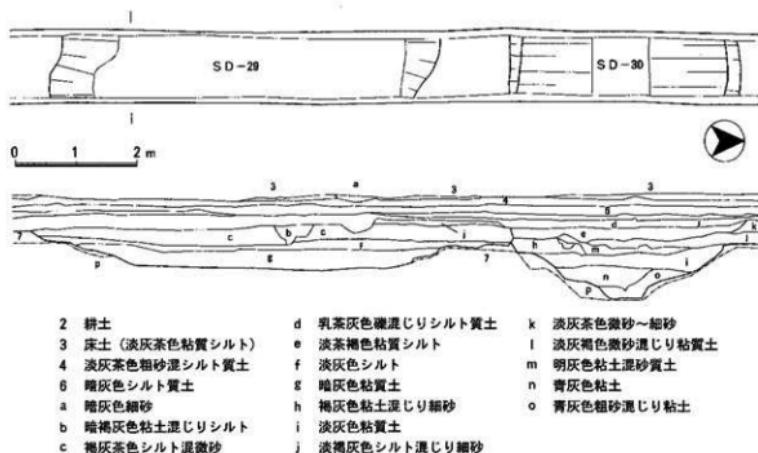
調査区北部(2K区)で検出した東西方向に伸びる溝で、東西ともに調査区外に至る。幅約5.0m前後、深さ約0.4m前後を測る。底面はフラットで、植物遺体が多量に含まれる粘土層がレンズ状に堆積している。この溝は第3区SD-29と同じ堆積土を呈しており、同一のものと思われる。遺物は平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・瓦片をごく少量出土した。図示できたものは10点(36～45)である。(36～39)は土師器小皿である。(36～38)は口縁「て」字状を呈する特徴をもつ平安時代後期のものである。(40)は杯で口縁部で屈曲外反している。(41・42)は土師器皿で、(41)は平安時代前半の時期の特徴をもつ。(43～45)は瓦器楕である。(43・44)は底部のみの破片で、(43)は高台断面が逆三角形、(44)は断面逆台形を呈するもので、杯部内面にヘラミガキがみられる。(45)は杯部1/4の破片で、やや深めの楕である。

SD-30

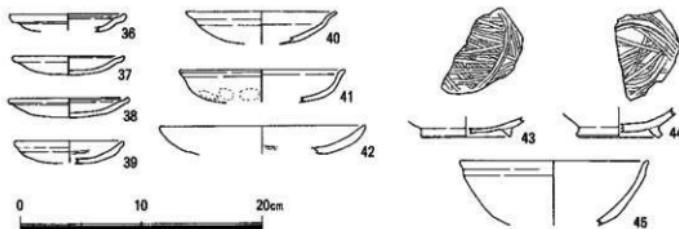
SD-29の北部(2K区)で検出した東西方向に伸びる溝で、東西ともに調査区外に至る。幅約4.0～4.5m、深さ約1.0mを測る。断面形状はすり鉢形を呈する。埋土は粘土と細砂のブロック上で、人為的に埋められているようである。溝の中層に繩目・布目がみられる平瓦の破片が少量含まれていた。

遺構に伴わない出土遺物

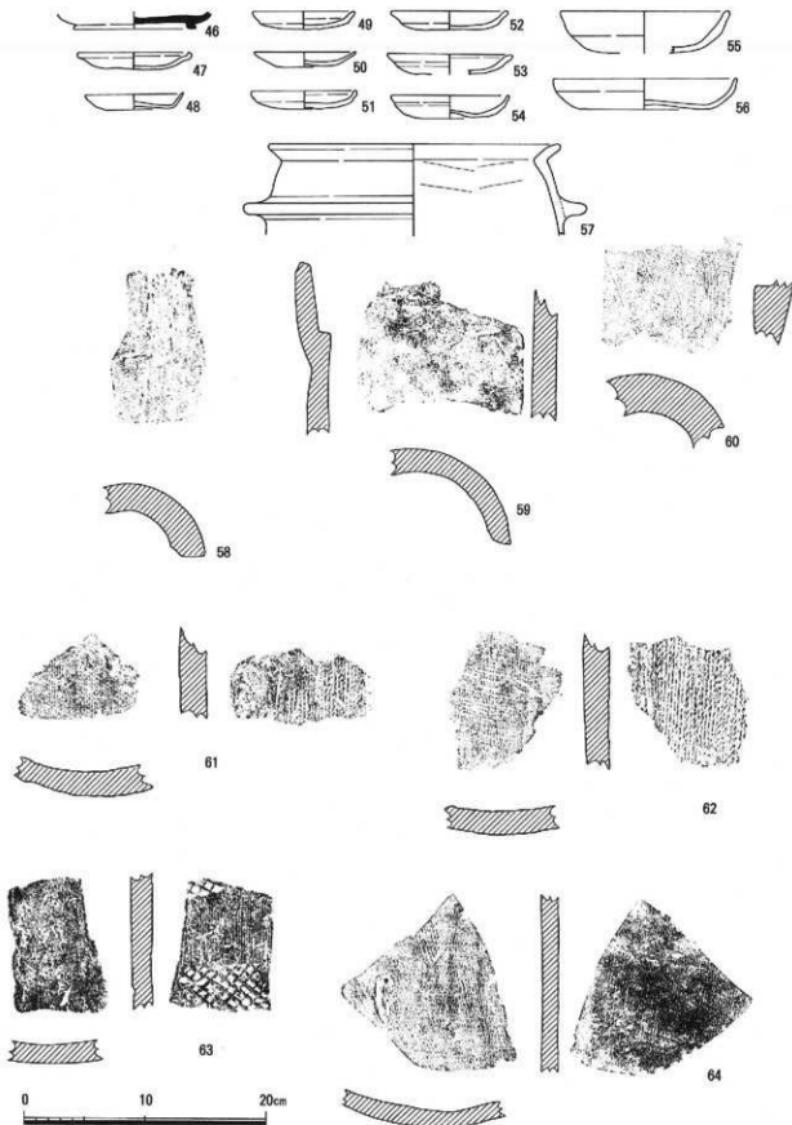
第6層内で古墳時代前期～平安時代にかけての土器類を少量出土している。図示できたものは15点である(第6図)。(46)は須恵器の杯で断面台形の高台が付く。(47～56)は土師器で、(47～54)は小皿、(55・56)は中皿である。(47)は平安時代中期～後期の形態的特徴がみられる小皿である。(57)は土師質の羽釜で、口縁部が「く」の字を呈しており、鎌倉時代前期のものであろう。(58～60)は丸瓦、(61～64)は平瓦で、凹面には布目、凸面には繩目がみられ、(63)は格子タタキのちハケを施している。これらはすべて平安時代末～鎌倉時代初頭のものである。



第13図 4区SD-29・30断面図



第14図 SD-29出土遺物実測図



第15図 4区 造構に伴わない出土遺物実測図

## 第4節 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種 山土地点	法量(cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎上	焼成	遺存状況	備考
1 土師盃鉢 第1区 SE-2	口径 49.2	外面: ヨコナデ、断面台形の 凸帯巡る 内面: ヘラナデ、接合痕残存	淡茶赤色	やや粗 (3mm の砂粒を含む)	良好	口縁1/7		
2 土師器鉢 第1区 SD-10	口径 18.2	外面: ヨコナデ、指頭圧痕残 存 内面: ヘラミガキ	外 淡茶橙色 内 灰黑色	密 (1mm以下 の砂粒を含む)	良好	口縁1/4		
3 土師器杯 第1区 SD-3	口径 器高 13.8 3.7	外面: ヘラミガキ、底部ヘラ ミガキ 内面: ヘラナデ	茶色	密 (1mm以下 の砂粒を含む)	良好	1/8		
4 土師器小皿 第1区 SD-3	口径 7.9 器高 1.4	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ナデ	淡茶灰色	密 (1mm以下 の砂粒を含む)	良好	完形		
5 土師器羽釜 第1区 SD-1	口径 24.2 身径 31.2	外面: 口縁部ヨコナデ、肩ヨ コナデ、ヘラナデ 内面: ヨコナデ、指ナデ	茶褐色	密 (1.5mm以 下の砂粒を含 む)	良好	口縁1/5		
6 土師器甕 第1区 SD-1	口径 21.4	外面: ヨコナデ 内面: 口縁部ヨコナデ、体部 ヘラナデ	茶灰色	密 (1mm以下 の砂粒を含む)	良好	口縁1/8		
7 円筒埴輪 第1区 包含層	径 38.6 タガ径 52.6	外面: ヨコハケ、タガヨコナ デ 内面: ナデ	橙茶色	やや粗 (1.5 mmの砂粒を含 む)	良好	小片		
8 須恵器甕 第1区 包含層	口径 33.9	外面: 回転ナデ、体部外側 タキ、回転カキ目 内面: 回転ナデ	灰色	1.5mm以下 の砂粒を含む	良好	小片		
9 同上	最大径 42.2	外面: タタキ 内面: ヘラナデ	黄褐色	密	良好	体部1/3		
10 土師器甕 第1区 包含層	口径 16.3	外面: 口縁部ナデ、体部ヘラ ケズリ 内面: ナデ、下部ヘラナデ	茶褐色	1mm以下 の砂 粒を含む	良好			
11 同上	口径 21.0	外面: ヨコナデ 内面: ナデ	茶色	密 (1mm以下 の砂粒を含む)	良好	口縁1/6		
12 同上	口径 23.5	外面: ヨコナデ 内面: ナデ	外 茶色 内 茶色	1mm以下 の砂 粒を含む	良好	小片		
13 狹底器杯身 第1区 包含層	底径 10.0	内外面: 回転ナデ、底端外側 ヘラケズリ	灰色	密 (1mm以下 の砂粒を含む)	良好	底部1/2		
14 土師器杯 第1区 包含層	口径 15.1 器高 3.0	内外面: ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	0.5mm以下 の砂粒を含む	良好	ほぼ完形		
15 土師器甕 第1区 包含層	厚さ 2.3	外面: ハケナデ 内面: ナデ	茶褐色	密 (2mm以下 の砂粒を含む)	良好	小片		
16 土師器甕 第2区 SD-21	口径 26.0	内外面: ヨコナデ、ナデ	茶灰色	密 (2.5mm以 下の砂粒を含 む)	良好	口縁1/10		
17 土師器甕 第2区 SD-25	口径 16.8	内外面: ヨコナデ、ナデ	外 褐茶色 内 褐黑色	0.5mm以下 の砂粒を少量含 む	良好	口縁1/7		
18 土師器小皿 第2区 SD-28	口径 9.3 器高 1.8	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ナデ	淡茶灰色	0.5mm以下 の砂粒を微量に 含む	良好	1/2		

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量(cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
19	瓦器輪 第2区 SD-29	底径 4.5	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラミガキ	外 乳灰色 内 灰色	密(1mm以下 の砂粒を含む)	良好	底部1/2	
20	平瓦 第2区 SD-28	厚み 2.8	凸面:鷹目 凹面:布目	淡灰茶色	精良	良好		
21	土師器甌 第2区 SD-27	口径 10.4	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ナデ	茶橙色	密(1mm以下 の砂粒を微量 に含む)	良好	口縁1/6	
22	瓦質羽釜 第2区 SD-27	口径 28.6 鉢径 37.5	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	淡橙茶灰色	2mm以下の砂 粒を微量に含 む	良好		
23	土師器甌 第2区 包含層	口径 18.4	内外面:ヨコナデ、ナデ	茶橙色	密(1mm以下 の砂粒を含む)	良好	口縁1/8	
24	土師器甌 第2区 包含層	口径 13.0 器高 3.1	内外面:ヨコナデ、ナデ、指 ナデ	茶橙色	密(1mm以下 の砂粒を微量 に含む)	良好	1/5	
25	土師器甌 第2区 包含層	口径 13.3 器高 2.6	外面:ヨコナデ、ヘラナデ 内面:ナデ	淡灰茶色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	3/2	
26	同 上	口径 13.2 器高 2.3	内外面:ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁4/1	
27	同 上	口径 16.2	内外面:ヨコナデ、ナデ	淡茶灰色	密(0.5mm以 下の砂礫を含 む)	良好	1/6	
28	丸器輪 第2区 包含層	口径 15.2 器高 5.5 底径 5.6	外面:ヨコナデ、ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	淡灰色	密(0.1mm以 下の砂粒を含 む)	良好	1/10	
29	同 上	口径 15.8	内外面:ヨコナデ、ヘラミガ キ	灰黑色	密(1mm以下 の砂粒を微量 に含む)	良好	口縁1/10	
30	磁器輪 第2区 包含層	底径 5.5	内外面:回転ナデ、釉、内面 に輪柄	淡綠灰色	密(1mm以下 の砂粒を微量 に含む)	良好	小片	
31	瓦質羽釜 第2区 包含層	口径 22.7 鉢径 29.4	外面:回転ナデ、ヘラケズリ 内面:回転ナデ	灰色	やや密(1mm 以下の砂粒を 微量に含む)	良好	口縁1/6	
32	土師器小皿 第3区 包含層	口径 9.6 器高 1.9	内外面:ヨコナデ、ナデ	淡茶橙色	密(1.5mm以 下の砂粒を微 量に含む)	良好	1/4	
33	土師器中皿 第3区 包含層	口径 15.7 器高 3.3	同 上	灰白色	密	良好	1/5	
34	土師器甌 第3区 包含層	口径 15.8	同 上	外 黑褐色 内 淡茶褐色	密(2mm以下 の砂粒を微量 に含む)	良好	口縁1/6	
35	平瓦 第3区 包含層	厚み 2.0	凸面:鷹目 凹面:布目	灰白色~黑色	密(2mm以下 の砂粒を微量 に含む)	良好	小片	
36	土師器小皿 第4区 SD-29	口径 9.7	内外面:ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密(1mm以下 の砂粒を微量 に含む)	良好	口縁1/2	

## VI 太子堂遺跡第8次調査 (TS98-8)

遺物番号 図版番号	器種 出土点	法量 (cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	遺存状況	備考
37	土師器小皿 第4区 SD-29	口径 器高 9.3 1.5	内外面: ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密 (1.5mm以下の砂粒を微量に含む)	良好	1/4	
38	同上	口径 器高 9.7 1.6	内外面: ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密 (1mm以下の砂粒を微量に含む)	良好	1/3	
39	同上	口径 器高 9.1 1.8	内外面: ヨコナデ、ナデ	灰褐色	密 (1mm以下の砂粒を微量に含む)	良好	1/2	
40	土師器杯 第4区 SD-29	口径 12.4	内外面: ヨコナデ、ナデ	乳茶灰色	密	良好	口縁1/6	
41	土師器皿 第4区 SD-29	口径 器高 14.8 3.0	内外面: ヨコナデ、ナデ	乳橙灰茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好		
42	同上	口径 器高 16.0 2.4	内外面: ヨコナデ、ナデ	淡灰茶色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好		
43	瓦器輪 第4区 SD-29	底径 7.4	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヘラミガキ	外 淡灰褐色 内 黑灰色	密 (1mm以下の砂粒を微量に含む)	良好	底部1/2	
44	同上	底径 7.0	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヘラミガキ	外 淡褐灰色 内 黑灰色	密 (0.5mm以下の砂粒を微量に含む)	良好	底部1/2	
45	同上	口径 6.6	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: 磨耗のため調整不明瞭	外 乳灰色～ 内 淡綠灰色	精良	良好		
46	須恵器杯身 第4区 包含層	底径 10.0	内外面: 回転ナデ	灰色	密	良好	底部2/3	
47	土師器小皿 第4区 包含層	口径 器高 9.5 1.4	内外面: ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	完形	
48	同上	口径 器高 8.1 1.4	内外面: ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	ほぼ完形	
49	同上	口径 器高 8.5 1.4	内外面: ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	4/5	
50	同上	口径 器高 8.4 1.2	内外面: ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	完形	
51	同上	口径 器高 16.0 2.4	内外面: ヨコナデ、ナデ	凹面 灰色 凸面 暗灰色	1～4mmの砂粒を含む	良好		
52	同上	口径 器高 9.7 1.5	内外面: ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	2/3	
53	土師器中皿 第4区 包含層	口径 10.3	内外面: ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	1/3	
54	同上	口径 器高 9.7 1.9	内外面: ヨコナデ、ナデ	浅黄橙色	密	良好	1/3	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法規(cm) 口径 器高	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	保存状況	備考
55	同上	口径 13.9	外面:ヨコナデ、ナデ	灰白色	密	良好	1/4	
56	同上	口径 15.1 器高 2.5	外面:ヨコナデ、ナデ	浅黄褐色	密	良好	4/5	
57	上部器羽釜 第4区 包含層	口径 23.7 鉢径 28.3	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ヘラナデ	淡茶褐色	やや粗(1.5 mmの砂粒を含む)	良好	口縁1/3	
58	丸瓦 第4区 包含層	厚さ1.5~3.0	凹面:布目 凸面:繩目	灰白~黒色	1~4 mmの砂 粒を含む	良好	破片	
59	同上	厚さ 2.0	凹面:布目 凸面:繩目	灰白~黒色	1~2 mmの砂 粒を含む	良好	破片	
60	同上	厚さ 3.0	凹面:布目 凸面:繩目	灰色	1~4 mmの砂 粒を含む	良好	破片	
61	平瓦 第4区 包含層	厚さ 2.2	凹面:布目 凸面:繩目	灰白色	密	良好	破片	
62	同上	厚さ 2.0	凹面:布目 凸面:繩目	凹面 黒色 凸面 灰白色	密	良好	破片	
63	同上	厚さ 1.7	凹面:布目 凸面:繩目、格子目	橙色	密	良好	破片	
64	同上	厚さ 1.4	凹面:布目 凸面:繩目	灰白色	密	良好	破片	

## 第2章 まとめ

今回の調査は、南北に細長いトレンチ状の調査区で平面的な調査はできなかつたが、北部で古墳時代～平安時代前期の遺構・遺物を主に、中央付近から南部にかけては平安時代後期～鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出することができた。

調査地では、平成10年度市教委の遺構確認調査、当調査研究会が実施した公共下水道工事に伴う第7次調査(TS98-7)で平安時代末～鎌倉時代にかけての集落遺構および遺物包含層を検出している。さらに北東部(約150m)の大坂市域にあたる区画整理事業に伴う発掘調査では古墳時代後期～飛鳥時代の建物跡などの集落遺構が検出されており、大阪市域側では飛鳥時代の集落域の存在が想定されている。

今回の調査区では第1区・第2区の北部で奈良時代～平安時代前期の遺構・遺物を確認している。検出した遺構には柱穴跡と思われる小穴、焼土・炭を多量に含む小穴を検出しており、住居に関連する遺構が想定される。

上層では削平を受けている部分がみられるが、比較的浅いところから平安時代末～鎌倉時代に整地したと思われる土層を確認している。また生産域と思われる水田耕土は、調査区の南側(大阪市)へ広がっていることがわかった。

また包含層中より古墳時代中期ごろの円筒埴輪片が1点出土しており、近接周辺に古墳の存在が考えられる。調査地南部の大坂市域側に六反山古墳の推定場所が想定されており、その古墳との関連性が想定されるが、破片1点のみの出土であり詳細なことはわからない。

以上、調査の成績である。

### 参考文献

- ・岡田清一 1993『太子堂遺跡第1次調査・第2次調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告36 財団法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・坪田真一 1993「太子堂遺跡(第4次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告39 財団法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・成海佳子・藤田道子 1997「VII 太子堂遺跡(第3次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・成海佳子 1997「VIII 太子堂遺跡(第6次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』財団法人八尾市文化財調査研究会報告
- ・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文他 1984『亀井』—近畿自動車道大和川～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—(財)大阪文化財センター
- ・中西靖人・岡乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道信他 1985『亀井遺跡』—寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書II—(財)大阪文化財センター



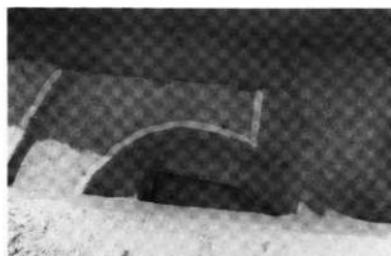
図 版



1区全景（南から）



1区SO-1（南から）



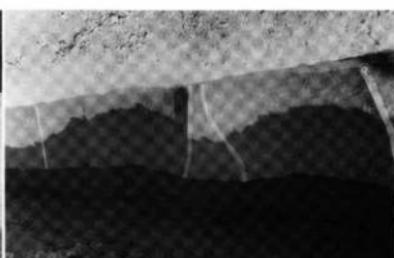
1区SE-1（東から）



1区SE-2（東から）



1区SK-2（西から）



1区SD-2・3（南から）

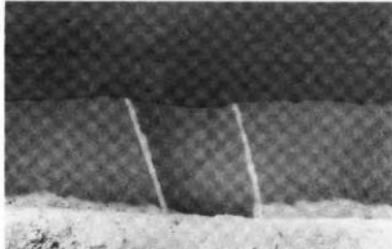


1区SD-6（東から）

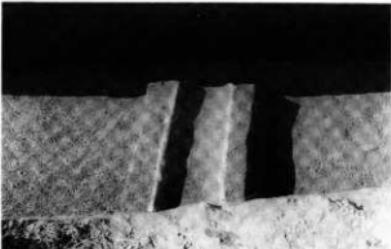


1区SD-5（南から）

図版二



第1区SD-8（東から）



第1区SD11（東から）



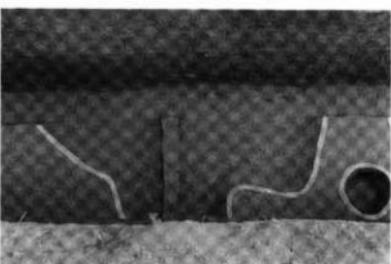
第2区全景（南から）



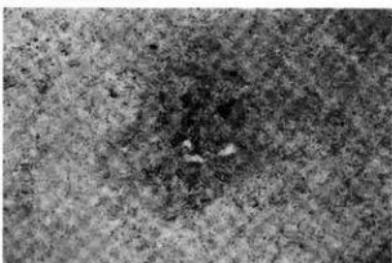
第2区



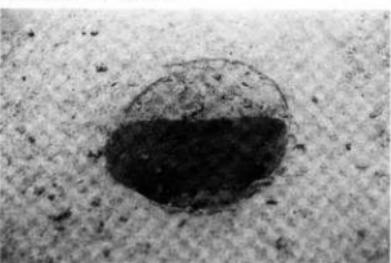
第2区全景（北から）



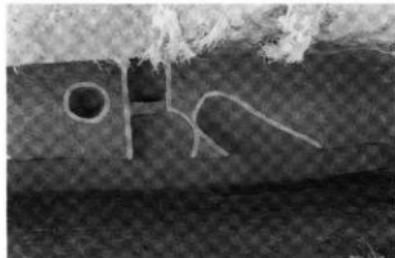
第2区SK-3（東から）



第2区SP-3（南から）



第2区SP-3断面（南から）



第2区 SD-16・17(東から)



第2区(西から)



第2区 SD-25(南から)



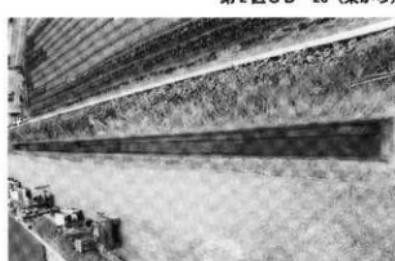
第2区 SD-20・21(東から)



第2区 SD-26(東から)



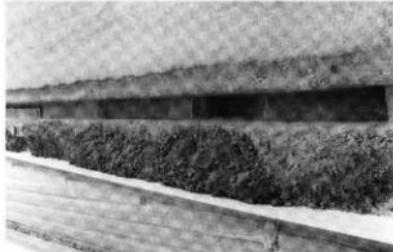
第2区(北から)



第3区全景(北から)



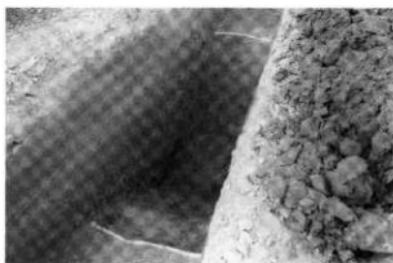
第3区全景(南から)



第4区（北から）



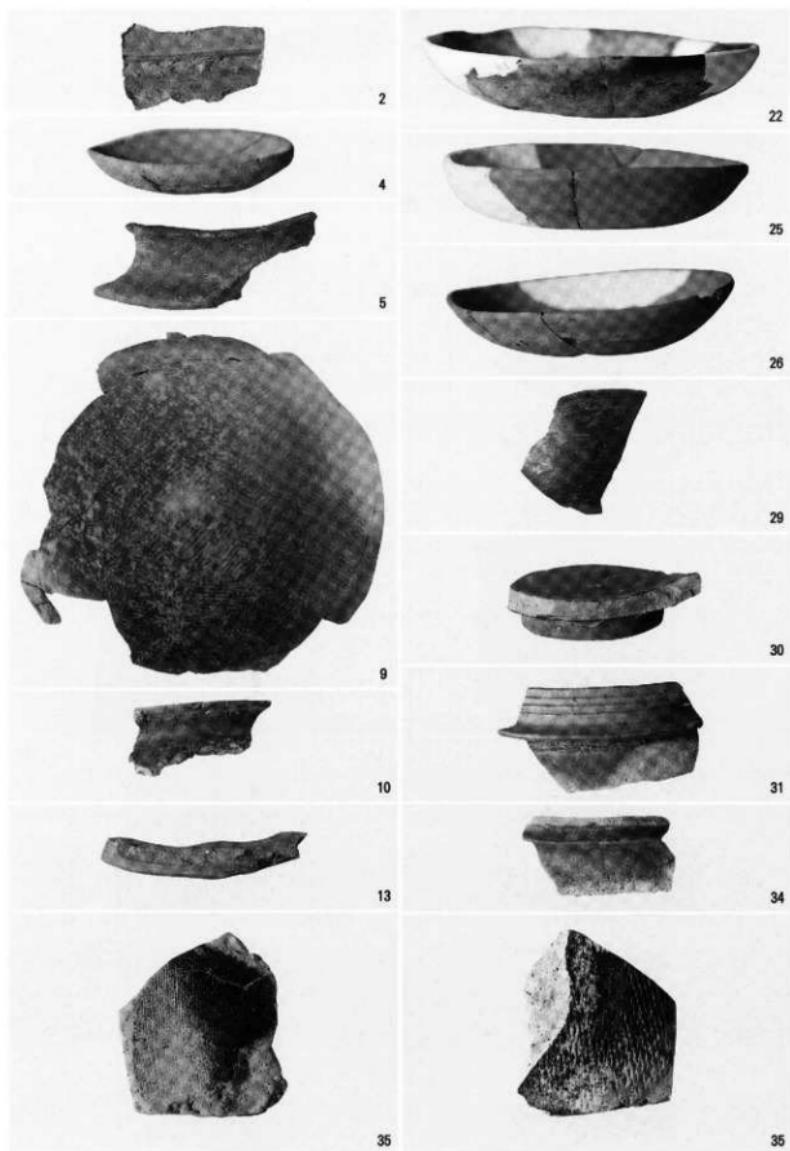
第4区（北から）

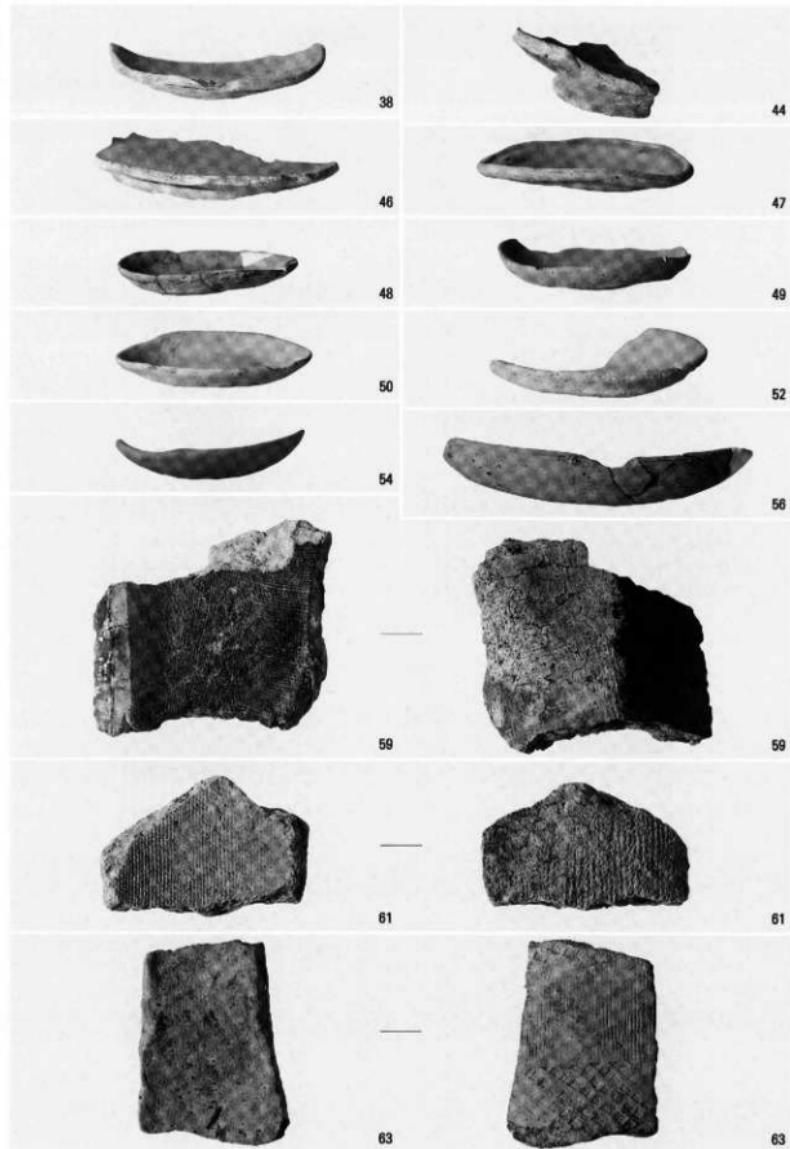


第4区SD-30（南から）



第4区（南から）





VII 東鄉遺跡第54次調查 (T G 97-54)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市北本町2丁目216番地内で実施した防火水槽設置工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第54次調査（TG97-54）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第687-3号 平成9年2月28日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年6月16日～6月19日（実働4日間）にかけて、樋口　薰を調査担当者として実施した。調査面積は約64m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査にあたっては、岩沢玲子、垣内洋平、岸田靖子、中西明美、西岡千恵子、西村和子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成11年8月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子、岸田、坂田典彦（現東大阪市教育委員会嘱託）、西岡、岡面トレース－市森、岸田、西岡、本書の執筆・写真撮影及び編集－樋口が担当した。

## 凡　　例

1. 遺構番号は、3桁の数字で表記した。上1桁については遺構検出面を示し、以下の桁は遺構の検出番号を表す。
1. 本書で使用している土器の器種分類や編年および年代は下記の文献に掲っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をそのつど提示することは割愛した。  
弥生土器－寺沢　薰・森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年－近畿編I－』木耳社  
土師器－古代の土器研究会 1992『古代の土器I 都城の土器集成』  
横田洋一 1981「付論 山土土師皿編年試案」『平安京跡研究調査報告第5輯』  
須恵器－出辯昭一 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ  
古代の土器研究会 1992『古代の土器I 都城の土器集成』  
瓦器－百瀬正恒・近江俊秀・尾上　実・森島康夫 1995「各地の土器様相7. 近畿」「土器・陶磁器6. 瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世上器研究会

## 本文目次

第1章 はじめに.....	95
第2章 調査概要.....	98
第1節 調査方法と経過.....	98
第2節 基本層序.....	99
第3節 検出遺構と出土遺物	
(1) 検出遺構 .....	102
(2) 出土遺物	
1、遺構内出土遺物 .....	105
2、地層内出土遺物 .....	108
第3章 まとめ .....	108

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000) .....	95
第2図 調査区位置図 (S = 1/400) .....	98
第3図 調査区西壁・北壁地層断面図 (S = 1/40) .....	100
第4図 調査区東壁地層断面図 (S = 1/40) .....	101
第5図 第1面平面図 (S = 1/80) .....	102
第6図 第2面平面図 (S = 1/80) .....	103
第7図 S E201平面図・断面図 (S = 1/40) .....	104
第8図 S K201平面図・断面図 (S = 1/20) .....	105
第9図 S D101・S O101出土遺物 (S = 1/4・1/2) .....	106
第10図 S E201・S K201・S K202出土遺物 (S = 1/4) .....	107
第11図 S E201出土耳環 (S = 1/1) .....	107
第12図 地層内出土遺物 (S = 1/4) .....	108

## 表目次

表1 調査地一覧表 .....	95
-----------------	----

## 図 版 目 次

- 図版一 調査地周辺状況（北から） 機械掘削状況（東から）  
西壁地層堆積状況（南東から） 北壁地層堆積状況（南東から）  
東壁地層堆積状況（南西から） 東壁地層堆積状況（T.P.+5.5～7.4m）
- 図版二 第1面全景（北から） 第2面全景（北から）
- 図版三 S E201（南東から） S K201（東から）
- 図版四 S D101（南から） S E201埋土断面（東から）  
S E201 耳環出土状況（南西から） S K202 士器出土状況（西から）  
調査参加者
- 図版五 S D101・S O101・S E201 出土遺物
- 図版六 S E201・S K201・S K202 出土遺物

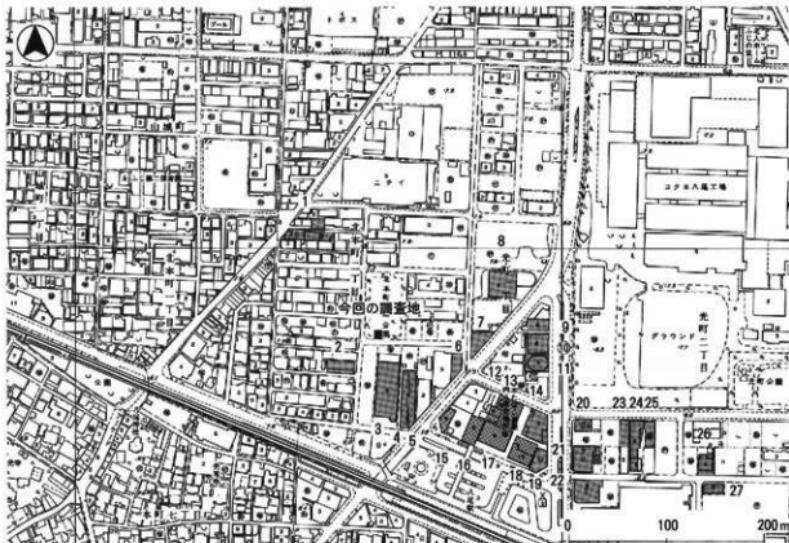
## 写 真 目 次

- 写真1 S E201出土耳環（S=1/1）

## 第1章 はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と右川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成されている。今回報告する東郷遺跡は、この大平野の東部に位置する八尾市のほぼ中央、現在の行政区画では、本町1・7丁目、東本町1~5丁目、北本町2丁目、光町1~2丁目、桜ヶ丘1~4丁目、荘内町1・2丁目の東西約1.1km、南北約0.9kmがその範囲と推定されている。この地域は、そのほぼ中央に近鉄八尾駅が位置し、この駅を中心としてその北側には八尾市域最大の大商業エリアが形成されている。一方駅の南側は、八尾市役所を中心とした公共施設が集まる本町1丁目付近以外は閑静な住宅街が広がっており、まったく異なる街並みを見せていている。

さて、当遺跡は、昭和46年に八尾市東本町2丁目で水道管敷設工事が行われた際、現地表下約1.5mで墨書き土器等が発見され（西岡1977）、その存在が確認された。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会による多次にわたる調査の結果、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されている。特筆すべき成果については、既刊の『東郷遺跡第44次調査』（坪田1998）に詳細が述べられているため、ここでは、これから報告を行う本調査地を含む遺跡の西部地域について概観していく。この地域におけるもっとも古い時期の遺構は、弥生時代中期



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

にまで遡る。第15次調査地（高萩1989）では土坑が2基、第49次調査地（原田1996）では土坑が1基検出されているが、いずれも居住域を形成する遺構かどうかの判断は難しい。この地域では、弥生時代中期以前に埋没したと考えられる砂礫層が必ずといっていいほど認められることからも明らかのように、旧大和川の沖積作用により非常に不安定な環境にあったようで、集落を営むには不向きな地域であったようだ。古墳時代に入ると、沖積作用も安定期に入り、第17次調査地（駒沢1983）や第21次調査地（米田1986）では方形周溝墓が築かれる。これらの墓域を形成した集団の居住域は、墓域の南西部に位置する第4次（高萩1981）、第12次（高萩1982）、第19次（米田・嶋村1985）、第25次（西村1995）が想定されている。第25次調査地では水田も検出されており、ミクロ的にはあるが、居住域・墓域・生産域をセット関係にした集落の存在が見えてきそ

表1 調査地一覧表（地図番号は第1図に対応）

地図番号	調査名	調査地番	調査原因	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	調査機関
1	TG03-41	北本町2丁目43-1	共同住宅	120	平成5年8月30日～9月6日	八文研
2	TG96-53	北本町2丁目67-2、68	共同住宅	100	平成8年12月2日～12月12日	八文研
3	TG87-25	北本町2丁目240～242	共同住宅	900	昭和62年7月20日～9月17日	八文研
4	TG81-04	北本町2丁目145-12	貸ビル	125	昭和56年5月13日～5月26日	八文研
5	TG82-12	北本町2丁目133-1・2、134-3	貸ビル	200	昭和57年8月5日～8月27日	八文研
6	TG85-19	北本町2丁目232	ビル	207	昭和60年4月1日～4月27日	市教委
7	TG03-44	光町1丁目38～41	ホテル等	370	平成6年1月10日～2月9日	八文研
8	TG91-36	光町1丁目37	自動車展示場等	560	平成3年5月20日～6月18日	八文研
9	TG86-21	光町1丁目43・44	病院		昭和61年10月6日～10月28日	市教委
10	TG83-17	光町1丁目47-1他	貸ビル	480	昭和58年11月24日～12月15日	八文研
11	TG88-28	光町1丁目47	ビル	86	昭和63年7月26日～8月11日	八文研
12	TG83-16	光町1丁目69-2、北本町2丁目145-12	貸ビル	200	昭和58年8月1日～8月13日	八文研
13	TG03-40	光町1丁目51・52	共同住宅	352	平成5年6月3日～6月25日	八文研
14	TG82-14	光町1丁目72	店舗	480	昭和58年3月18日～4月21日	八文研
15	TG83-15	光町1丁目132-2	貸ビル	300	昭和58年5月13日～5月25日	八文研
16	TG81-3	光町1丁目69-2	貸ビル	64	昭和58年4月13日～4月15日	市教委
17	TG89-31	光町1丁目61	事務所ビル	660	平成元年5月18日～7月8日	八文研
18	TG83-18	北本町2丁目141	店舗付住宅	500	昭和56年3月1日～4月10日	八文研
19	TG81-5	光町1丁目88	貸ビル	196	昭和56年6月8日～7月7日	市教委
20	TG81-9	光町1丁目47	貸ビル	210	昭和56年12月4日～12月23日	市教委
21	TG81-8	光町2丁目156	貸ビル	565	昭和56年10月15日～12月4日	市教委
22	TG81-10	光町2丁目17	貸ビル	621	昭和57年2月1日～3月12日	市教委
23	TG90-35	光町2丁目19	共同住宅	140	平成3年3月4日～3月19日	八文研
24	TG82-11	光町2丁目	共同住宅	500	昭和57年5月8日～6月10日	市教委
25	TG95-49	光町2丁目2番22号	共同住宅	140	平成7年6月14日～6月23日	八文研
26	TG88-28	光町2丁目28-1他3筆	店舗付共同住宅	220	平成元年3月6日～3月25日	八文研
27	TG88-32	光町2丁目59	共同住宅	130	平成元年9月26日～10月7日	八文研
今回の調査地	TG97-54	北本町2丁目216	防火水槽	64	平成9年6月16日～6月19日	八文研

調査機関＝市教委：八尾市教育委員会 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会

うである。前期では、第44次調査地において掘立柱建物などで構成される遺構群が検出されており、当地域は前代に引き続き安定した生活環境にあったと考えられる。古墳時代中期～平安時代後半にかけては、居住域はほとんど検出されておらず、東部地域に移動する。この間、西部地域がどのように土地利用されていたかはほとんど明らかにされていない。わずかに第25次調査地において水田が検出されているだけである。今後の調査に期待したい。平安時代後期に入ると、西部地域の至るところで井戸を中心とした遺構群が認められ、末期には第25次調査地を中心とした地域で居住域が形成される。同時期の東部地域では、官衙的な公共施設あるいは寺院の存在を想定させる成果も報告されており（道1995a）、当地域とは全く異なる様相を見せている。

当遺跡は、おおむねその流れを北に向ける古玉串川・古楠根川・古長瀬川の沖積作用により形成された自然堤防や後背湿地などの微地形を利用して集落が営まれているが、同地形上にはこれ以外にも多くの遺跡の存在が確認されている。そのうち、当遺跡の周辺に限れば、北に萱振遺跡、南に成法寺遺跡、西に宮町遺跡、八尾寺内町遺跡、南東部に小阪合遺跡などが挙げられる。以下、各遺跡の特筆すべき成果について概説していく。

**萱振遺跡** 弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。当遺跡における最古の遺構は、弥生時代中期の水田であるが、遺物については、弥生時代前期の河川から縄文時代晚期に属する土器が出土している（広瀬1989）。弥生時代前期新段階に入ると、当遺跡の北西約2kmに位置する山賀遺跡において水田経営が開始される（生田・小林1982）。当遺跡でも河川から土器が出土し、当該期の集落が存在する可能性が考えられ、河内平野における稲作導入先行地域が、古玉串川・古楠根川・古長瀬川の河口部であったことを可視的に示す貴重な資料を提供している。また中期～後期にかけては、幾度となく引き起こる洪水と戦いながらも水田経営が行われる。一方、古墳時代前期には、直弧紋を刻み、赤く彩色が施された羽形埴輪などを伴う萱振1号墳が築造される（広瀬他1992）。この古墳は、その規模からは想像もつかないほどの豊富な埴輪類が出土しており、これらばかりが注目されがちであるが、それ以上に河内沖積平野に未だ埋没している古墳の存在を知らしめたことも意義深い。

**成法寺遺跡** 弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。当遺跡における最古の遺構は、小阪合遺跡や東郷遺跡に隣接する、遺跡の北東部で検出された弥生時代中期の方形周溝墓である（山上1989）。古墳時代に入ると、庄内式期の墓域が、遺跡の西部（高秋他1983）と最北部（福田1986）でそれぞれ検出されている。西部のものは古長瀬川の、最北部のものは古楠根川の自然堤防上に展開するものと思われ、それぞれの墓域を形成する集団は異なると考えられる。特に最北部でその存在が確認された墓域では、他に類例の少ない円形周溝墓となる可能性が高いものも含まれ、その特異性が注目されている。

**宮町遺跡** 『河内鑑名所記』『和漢三才図会』などの文献に記されている大日山千眼寺に比定される遺跡である。平安時代後期～室町時代にかけての瓦が多量に出土している（原田1983）。

**八尾寺内町遺跡** 弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。遺跡名にもあるように1607年以降、東本願寺の掛所としての大信寺御坊を中核とした寺内町が形成されるが、久宝寺寺内町とは、その成立過程は異なる。これまでに3次にわたる調査が実施されているが、寺内町期の顕著な遺構は報告されていない。

**小阪合遺跡** 弥生時代中期～近世にかけての複合遺跡である。弥生時代中期の遺構は、第18次

調査地（成海1990）の一箇所でしか確認されていない。ここでは居住域の中核を担っていたと思われる井戸などの遺構群を検出している。先述した成法寺遺跡においても同時期の墓域が検出されているが、当遺構群との有機的な関係は不明である。一方、後期になると、この居住域は生産域に変貌を遂げ、居住域は遺跡の北西部に移動するようである。古墳時代以降は旧大和川の沖積作用が安定したためか、各時代の遺構が多量に検出されている。第20次調査地では、古墳時代前期の河川から国内最古の出土例にあたる漆塗木製横櫛が出土した（坪田1993）。遺跡の東部に位置する第4次調査地（高萩1989）では、古墳時代中期に属する埴輪円筒棺が出士したが、この成果は埋没古墳の存在を示しているのかもしれない。古代～中世にかけては、遺跡の南部で居住域を形成する遺構群を検出しているほか、平成10年に遺跡の北部で行われた大阪府文化財調査研究センターの調査では、河川から土器や馬・牛の骨などと共に、57枚もの和銅開珎が出土した。これらの遺物は祭祀に伴うものと考えられるが、当遺跡の南部や遺跡に北接する東郷遺跡などでは墨書き人面土器の存在が知られるほか、東郷廃寺遺跡（酒1995b）では、後期難波宮で初めて採用されたものに類似した重圓文軒丸瓦が出土していることなどから勘案して、祭祀を行う特異な居住域、つまり寺院や官衙などの公共施設を想定できないだろうか。当時期の当遺跡と東郷遺跡南東部との有機的な関係を垣間見ることができそうである。

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査方法と経過

今回の発掘調査は、八尾市北本町2丁目216番地内における防火水槽設置工事に伴うもので、当調査研究会が東郷遺跡内で実施した第54次調査（TG97-54）にあたる。調査区は一箇所である。事前の協議では、調査区は東西幅約6.5m・南北幅約6.5m、面積約40m<sup>2</sup>で設定したが、掘削の都合上、東西幅約8m・南北幅約8m、調査総面積は約64m<sup>2</sup>に変更した。調査は、現地表（T.P.+7.4m前後）下1.0m前後までを機械掘削とし、以下は、現地表下2.0m前後までの1.0mを人力掘削と機械掘削を併用して行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、2面（第1面・第2面）で遺構を検出した。第1面では、現地表下1.0m（T.P.+6.4m）前後の第5層上面で平安時代後期に比定される溝1条（SD101）・落ち込み1基（SO101）を検出した。第2面では、現地表下1.3m（T.P.+6.1m）前後の第7層上面で、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺構を検出した。調査期間は、平成9年6月16日～6月19日（実働4日）である。

### 第2節 基本層序

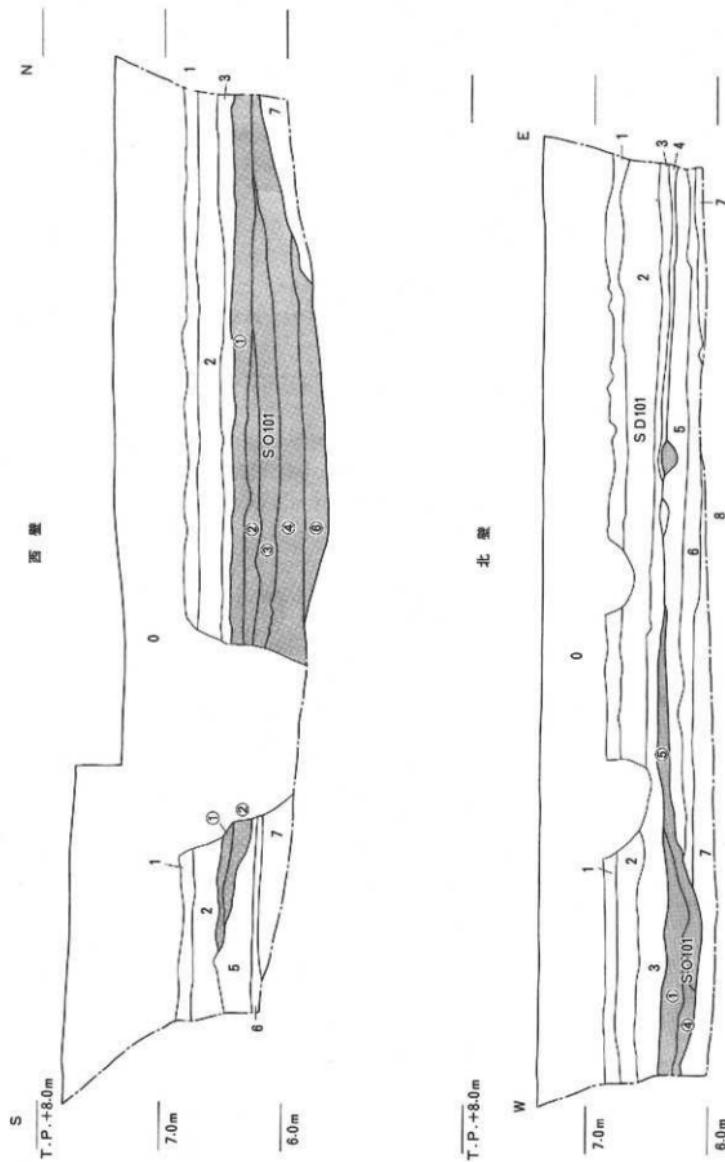
本調査では、T.P.+6.0～7.4m前後の間において8層もの地層を確認した。これらの地層は、いずれもほぼ水平な堆積状況を示す。以下、各地層について概説していくと、第0層は整地に伴う客土・盛土である。第1層は、著しく攪拌を受けた層相や既往の調査成果のレベルなどから判断すると、区画整理に伴う整地以前の旧耕土に相当する。以下第2層～第6層までは疊混粘土優勢の粘土層が堆積する。各層とも非常に硬く緻まっており、土壤化の影響を受けているものと思

われる。第7層以下は、ラミナ構造が顕著な流水堆積が認められ、当層形成期の当調査地の古環境が河川域であったことを垣間見ることができる。なお、調査においては、第0層～第3層までを機械掘削とし、それ以下は、人力掘削と機械掘削を併用して実施した。

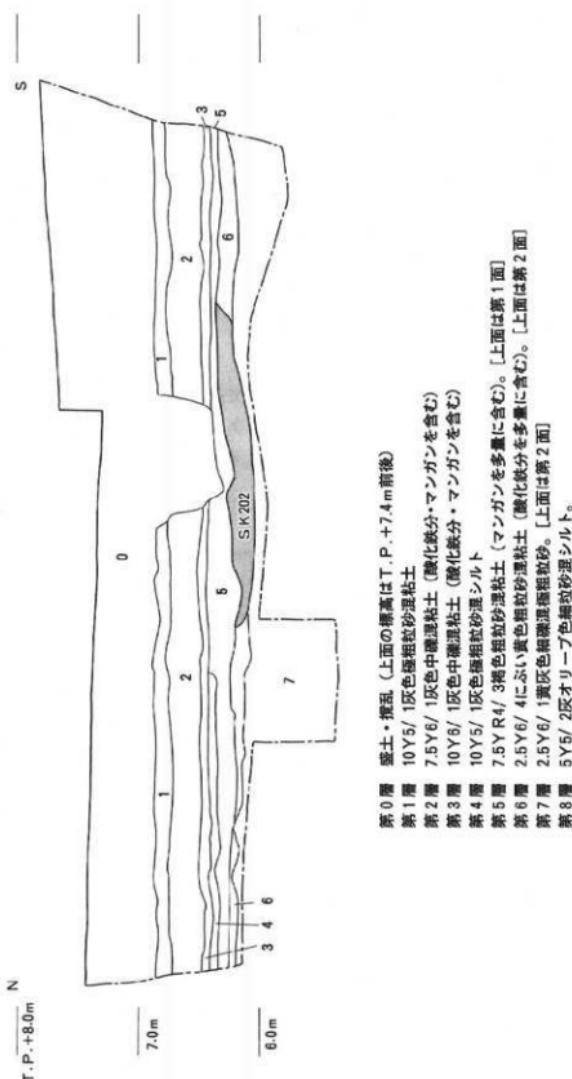
- 第0層 盛土・搅乱。上面の標高はT.P.+7.4m前後を測る。
- 第1層 10Y5/1灰色極粗粒砂混粘土。攪拌を受けた地層である。層厚は約0.1mを測る。
- 第2層 7.5Y6/1灰色中疊混粘土。酸化鉄分やマンガンを含む地層である。層厚約0.2m。
- 第3層 10Y6/1灰色中疊混粘土(酸化鉄分やマンガンを含む)。層厚は約0.1mである。
- 第4層 10Y5/1灰色極粗粒砂混シルト。調査地の北方にのみ存在する地層である。調査地東壁の地層観察では、第5層上面から切り込むラインが認められることから、S.O.101の埋土の可能性も考えられるが、本調査では第4層とした。層厚約0.1m。
- 第5層 7.5YR4/3褐色粗粒砂混粘土。マンガンを多量に含む、非常に硬く締まった地層である。層厚は約0.2mを測る。[上面は第1面]
- 第6層 2.5Y6/4にぶい黄色粗粒砂混粘土。酸化鉄分を多量に含む非常に硬く締まった地層である。層厚約0.1m。[上面は第2面]
- 第7層 2.5Y6/1黄灰色細疊混極粗粒砂。水平なラミナ構造が顕著に認められる流水堆積層である。本調査地での地層観察においては、河川の肩に相当するラインなどは認められなかった。また、その粒度組成が粗粒砂優勢であることなどから、本層形成期の本調査地は、河川の流芯に近い古環境を想定できそうである。層厚は0.5m以上である。  
[上面は第2面]
- 第8層 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂混シルト。第5層上面を構築面とする遺構の埋土である。



第2図 調査地位置図 (S = 1/400)



第3図 調査区西壁・北壁地層断面図 ( $S = 1/40$ )



第4図 調査区東壁地層断面図 (S=1/40)

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### (1) 検出遺構

##### [第1面]

現地表下1.0m (T.P.+6.4m) 前後の第5層上面で捉えた遺構面で、溝1条 (SD101)・落ち込み1基 (SO101) を検出した。

##### 溝 (SD)

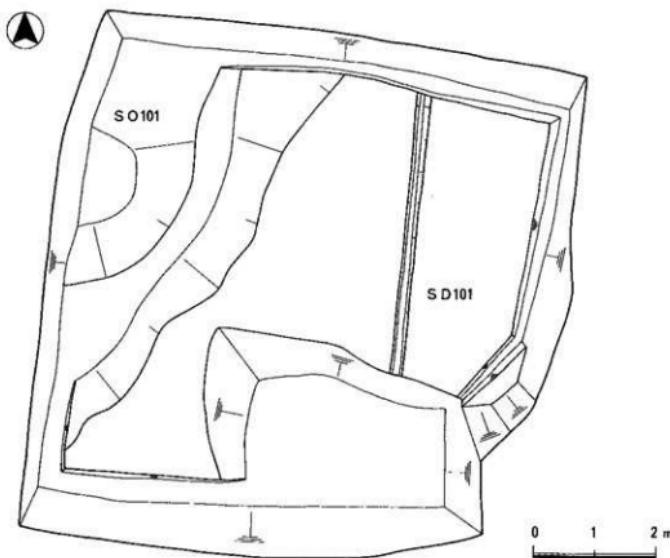
##### SD101

調査区中央よりやや東よりの地点で検出した、南一北方向に直線的に伸びる溝である。本遺構は、北部分と南部分がそれぞれ調査区外に続くため全容は不明であるが、検出部分で長さ4.5m以上、幅約0.2mを測る。断面形状はU字状で、深さは約0.1mである。埋土は5Y5/2灰オリーブ色細砂混シルトの單一層である。埋土内からは土器や須恵器の細片が出土したが、いずれも下層からの混入遺物であり、遺構の時期を決定付けるものではない。

##### 落ち込み (SO)

##### SO101

調査区北西部で検出した。北壁地層断面には西に向かって落ち込む肩が、西壁地層断面には北に向かって落ち込む肩がそれぞれ認められる。平面的には調査区北西外へ拡がる落ち込みであり、全容は不明であるが、検出部分で長辺は7.5m以上を測る。深さは約0.8mである。埋土は、上か



第5図 第1面平面図 (S=1/80)

ら①2.5Y6/4にぶい黄色極粗粒砂混粘土（酸化鉄分を多量に含む）、②7.5YR4/3褐色中礫混粘土（マンガンを多量に含む）、③10Y5/1灰色中礫混粘土質シルト（酸化鉄分を多量に含む）、④7.5Y5/1灰色シルト（未分解の木片を少量含む）、⑤7.5Y4/1灰色シルト混細礫、⑥2.5Y3/1黒褐色粘土の6層が確認された。遺構内からは6世紀代～12世紀代に比定される土師器・須恵器・瓦器・埴輪の細片が多数出土した。

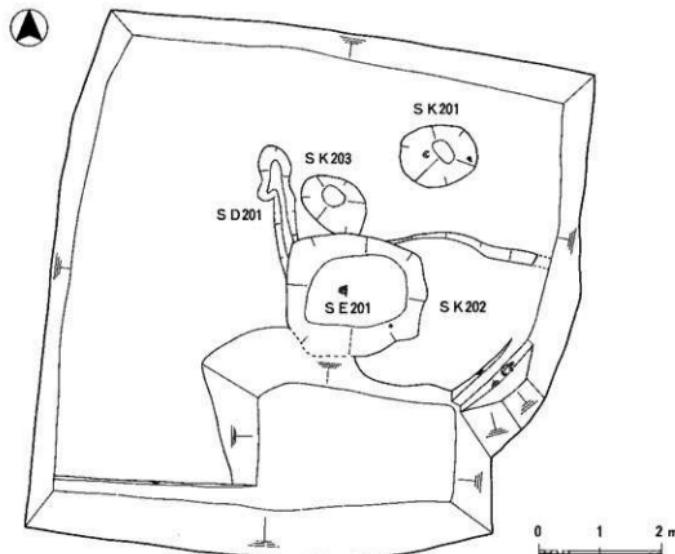
### [第2面]

現地表下1.2m (T.P.+6.2m) 前後の第6層上面と、現地表下1.3m (T.P.+6.1m) 前後の第7層上面で掘えた遺構面で、井戸1基 (S E201)・土坑3基 (S K201～S K203)・溝1条 (S D201) を検出した。この内、S E201は、本来第1面で検出しなければならなかった遺構である。また、S K201とS K202は第6層上面構築遺構、S K203とS D201は第7層上面構築遺構である。以下、各遺構について概説する。

#### 井戸 (S E)

##### S E201

調査区中央部で検出した井戸である。本遺構は第5層上面に構築されている。上面の一部はS D101に、また、南部分は攪乱により切られている。平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸方形を呈していたと推測される。検出長は長辺約2.3m・短辺約2.0mを測る。断面形状は不定形で、北肩と南肩とでその形状が異なる。深さは約0.7mである。北肩は、約70度の角度を保ちながら遺構構築面から下へ約0.4m直線的に掘り、その後、角度を約25度に緩めながら約0.3m掘り下げ



第6図 第2面平面図 (S=1/80)

ている。一方、南肩はほぼ20度の角度を保ちながら、遺構構築面から下へ0.7m前後掘削している。この両肩ラインの相違は、深くまで掘削しやすいように、片側の傾斜を緩くした結果を反映しているのかもしれない。なお、本遺構内から曲げ物などを利用した井戸側などは検出されていないため素掘り井戸であったと考えられる。埋土は上から①7.5Y5/1灰色極粗粒砂混粘土（酸化鉄分・マンガンがブロック状に混入する）、②7.5Y5/1灰色中疊混極粗粒砂（粘土のブロックを含む）、③10Y4/1灰色極粗粒砂混粗粒砂、④7.5Y4/1灰色極粗粒砂混粘土、⑤10Y4/1灰色粘土（粗粒砂のブロックを含む）の5層で構成されている。遺構内からは、弥生時代～12世紀代に比定される遺物が多量に出上した。特筆すべき遺物として、①層から出土した耳環、埋土最下層の⑤層から出土した瓦器碗があげられる。前者は、直接本遺構と結びつくものではないが、当調査地周辺に古墳が存在する可能性を示唆する遺物といえる。一方後者は、本遺構の廃絶時に埋置されたものと思われ、この瓦器碗の帰属時期が12世紀中頃であることから、本遺構の廃絶時期もこの頃に求めることができる。

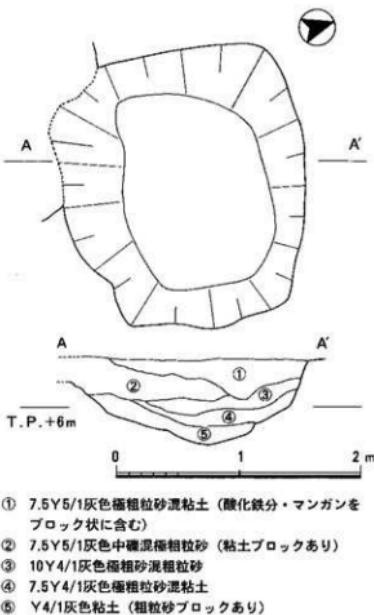
#### 上坑（SK）

##### SK201

調査区北東部で検出した。東西に長軸をもつ橢円形を呈し、その規模は東西径約1.2m、南北径約1.0mを測る。断面形状は、深い皿状を呈し、深さは約0.7mである。埋土は上から①7.5YR4/2灰褐色粘土（マンガンを多量に含む）、②5Y4/1灰色粘土（マンガンを含む）、③5Y4/1灰色極粗粒砂（酸化鉄分を含む。粘土のブロックを含む。）、④5Y4/1灰色極粗粒砂混粘土（マンガンを少量含む）、⑤5Y4/1灰色粘土（酸化鉄分を少量含む。）、⑥5Y4/1灰色粘土（炭化物を少量含む。）、⑦5Y4/1灰色極粗粒砂である。③層からは6世紀後半～末に比定される須恵器杯身や土師器鍋などが出土した。

##### SK202

調査区東部で検出した。遺構の西部をSE101に切られており、さらには、調査区東方に統くため全容は不明である。断面形状は、浅い皿状を呈し、深さは約0.2mを測る。埋土は10YR4/4褐色極粗粒砂混粘土質シルト（マンガンを多量に含む）の単一層である。遺構内からは、古墳時代初頭（庄内式期）に帰属する土師器の壺の一部等が出土した。



第7図 SE201平面図・断面図 (S = 1/40)

## SK 203

調査区中央部やや北の地点で検出した。東西径約1.2m、南北径約0.8mの楕円形を呈する。断面形状は浅い皿状で、深さは約0.1mを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混粘土（酸化鉄分・マンガンを含む）の單一層である。出土遺物はなかった。

## 溝(SD)

## SD 201

調査区中央部で検出した、ほぼ南北に伸びる溝である。遺構の南部をS E 101に切られてい るため全容は不明であるが、検出部分の長さは1.5m以上、幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土は10Y4/1灰色粗粒砂混粘土（酸化鉄分・マンガンを含む）の單一層で、遺構内から弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式期）に比定される上器片が1点出土した。

## (2) 出土遺物

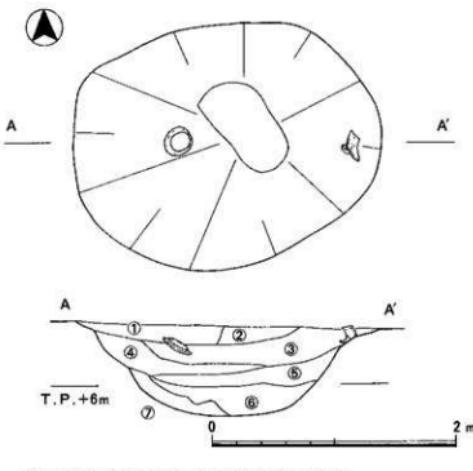
## 1、遺構内出土遺物

## SD 101内出土遺物(1・2)

土師器や須恵器の細片が7点出土した。この内、図化できたものは土師器(1)、須恵器(2)の2点である。1は、土師器の底部で、内・外側ともにナデ調整を施している。胎土は、やや粗で、2mm以下の砂粒を多く含む。2は小片のため復元は困難であるが、須恵器底の口縁部であろうか。口縁端部は内傾する平面を形成する。口縁端部から2.4cm下の外側には1条の凹線がめぐらされている。内面は回転ナデである。

## SO 101内出土遺物(3~13)

土師器・須恵器・瓦器・埴輪の細片が66点出土した。この内、図化できたものは土師器高杯(3・4)、土師器高台(5・6)、須恵器高杯(7・8)、須恵器壺(9)、須恵器壺(10)、須恵器横瓶(11)、埴輪(12)、石製品(13)の12点である。3は、手づくねにより成形された小型高杯の杯部～柱状部である。杯部は浅く、杯部は指押えにより作り出されている。柱状部外側は指ナデ調整を行っている。4は柱状部と裾部の屈曲が不明瞭な高杯である。外側は磨耗が激しく調整は不明であるが、柱状部内面にはしばり目痕が、裾部内面には指ナデが明瞭に残る。裾端部に



第8図 SK 201平面図・断面図 (S = 1/20)

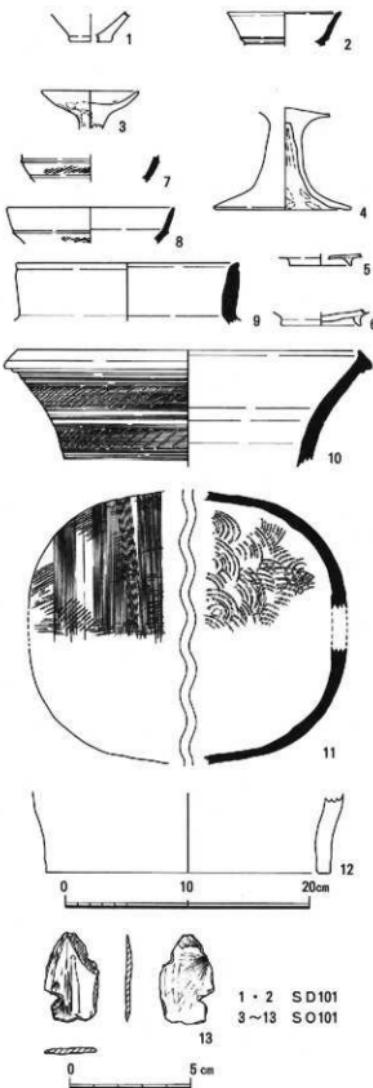
- ① 7.5Y R4/2灰褐色粘土（マンガンを多量に含む）
- ② 5Y4/1灰色粘土（マンガンを含む）
- ③ 5Y4/1灰色粗粒砂（酸化鉄分を含む・粘土のブロックを含む）
- ④ 5Y4/1灰色粗粒砂混粘土（マンガンを少量含む）
- ⑤ 5Y4/1灰色粘土（酸化鉄分を少量含む）
- ⑥ 5Y4/1灰色粘土（炭化物を少量含む）
- ⑦ 5Y4/1灰色粗粒砂

第8図 SK 201平面図・断面図 (S = 1/20)

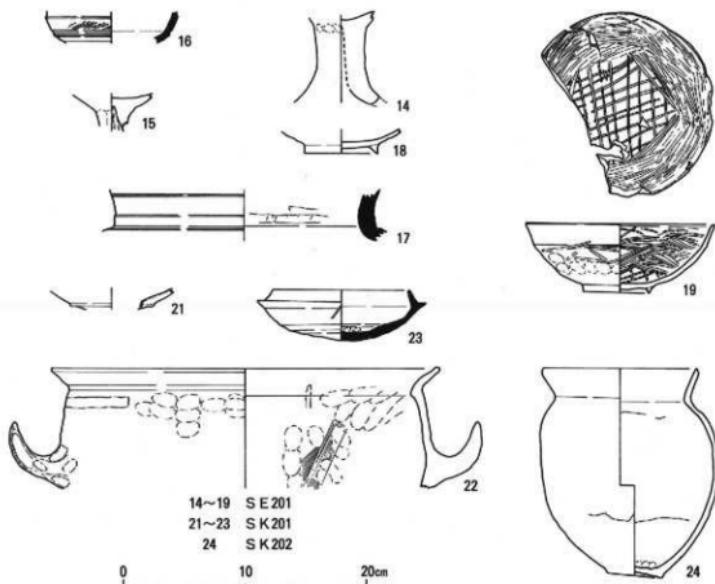
は煤が付着している。6世紀後半～7世紀前半に属するものであろう。(5・6)は器種不明の底部～高台部である。高台はいずれも貼り付けられている。(7・8)は長脚二段透し高杯の杯部である。杯部の中位～底部に、鋭い凸帯とヘラ描き斜行直線文が施されているのが特徴である。6世紀末～7世紀初頭にかけての所産であろう。9は口縁端部が内傾する平面を形成する広口短頸壺の口縁部～口頸部である。10は壺の口縁部～口頸部である。口縁下端部から1.0cm下の外面には鋭い凸帯が1条めぐる。口径部外面は、カキ目調整後5条の凹線が施される。これらの凹線は2条1組と考えられる。カキ目が施された後に櫛描き斜行列点文が施される。11は横瓶の一部と思われる須恵器片である。12は摩滅の激しい円筒埴輪の底部片である。13は用途不明石製品である。

#### S E 201内出土遺物 (14～20)

弥生土器・土師器・須恵器・瓦器が67点出土したが、図化できたものは9点だけである。14は弥生土器の高柱柱状部～裾部の一部である。柱状部は直線的で、裾部との屈曲点は明瞭でない。裾部には透孔が1個だけ確認できる。胎土はやや粗で、角閃石を多量に含む。牛駒西麓産のものである。15は、手づくね成形の小型高杯である。16は長脚二段透し高杯の杯部の細片、17は須恵器壺の口縁部である。18は瓦器椀の体底部～高台部である。先端の尖った断面逆三角形の貼り付け高台で、12世紀中頃の時期が与えられる。19は和泉型の瓦器椀である。体部外面のヘラミガキ調整は粗く、成形時の指頭圧痕が顕著に見られる。体部内面は分割ヘラミガキが密に施される。見込みのヘラミガキは格子状である。12世紀中頃～後半に属する。20は銅芯銀貼りの耳環である。



第9図 SD 101・SO 101出土遺物 (S = 1/4・1/2)



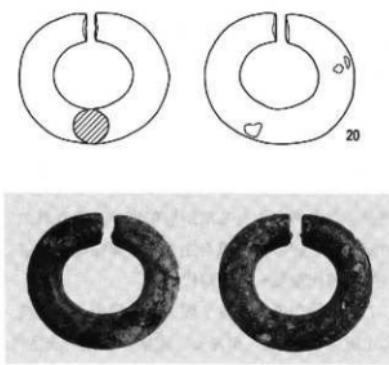
第10図 S E 201・S K 201・S K 202出土遺物 (S = 1/4)

## S K 201内出土遺物 (21~23)

遺物は、③層内から土師器・須恵器が14点出土した。この内、図化が可能なものは3点だけである。21は、内面に炭化物が付着した高杯の杯部細片である。22は土師器の鍋である。外面調整は、口縁部が横ナデ、体部が指ナデである。一方内面は、口縁部は横ナデ、体部は縦方向にハケ状の工具でナデを施した後、指ナデを行う。23は須恵器の杯身である。TK43~TK209型式に属するもので6世紀後半~末に比定される。

## S K 202内出土遺物 (24)

土師器が14点出土したが、図化できたのは24の甕のみである。外面は摩滅が激しく調整は不明である。内面は、底部に指頭圧痕が認められるほかは、ナデ調整を施す。底部は底



第11図 S E 201出土耳環 (S = 1/1)

部輪台技法により成形されている。共伴土器の中には、内面にヘラケズリが施されたものも含まれることから、これらの遺物の帰属時期は庄内式期に求めることができる。

## 2、地層内出土遺物

### 第5層内出土遺物（25～29）

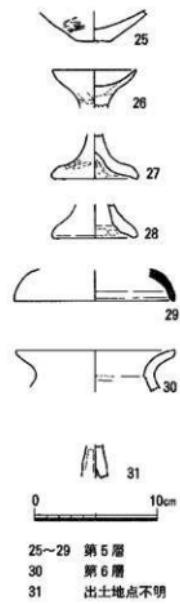
土師器・須恵器の細片が71点出土した。この内、図化が可能なものは5点だけである。25は土師器の体部～底部である。体部と底部の屈曲点がなく、しかも二次焼成を受けてないことから、器種は壺であろう。体部外面には右上に手づりのタクキ調整が行われる。庄内式期に帰属時期を求めることが可能である。26～28は土師器の小型高杯である。26は杯部～柱状部、27・28は柱状部～裾部で、3点とも指おさえによって成形された手づくね土器である。27の裾端部外面と裾部内面には黒斑が認められる。29は須恵器の杯蓋である。口縁部しか残っておらず復元は困難を極めるが、概ね6世紀末～7世紀初頭に帰属するものであろう。

### 第6層内出土遺物（30）

弥生土器の細片が22点出土した。これら帰属時期は弥生時代後期（畿内第V様式期）に求めることができる。この内、図化できたのは1点のみである。30は壺の口縁部である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面には口縁部と体部との接合痕が明瞭に残る。

### 出土地点不明遺物（31）

手づくねにより成形された土師器小型高杯柱状部である。



第12図 地層内出土遺物  
(S=1/4)

## 第3章まとめ

今回の調査では、概ね四時期の堆積層・遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ2箱である。以下、各時代について述べていく。

### 〔弥生時代後期以前〕

第7層がこの時期に相当する。ラミナ構造が顕著に認められる河川堆積層である。当調査地の南側約10mの地点に位置する第25次調査地や北東側約150mの地点に位置する第36次調査地（成海1991）、東側約100mの地点に位置する第44次調査地では、古墳時代初頭（庄内式期）頃までに埋没したと考えられる河川堆積層が確認されているが、これらと対応する地層である。当該期の当調査地周辺の古環境を知る上で興味深い成果といえる。

### 〔弥生時代後期～古墳時代前期〕

この時期の遺構には7層上面で検出した土坑（SK203）・溝（SD201）と6層上面で検出した土坑（SK202）がある。遺構の性格を決定付ける要素が乏しいが、当調査地の南側約10mの地点に位置する第25次調査地において古墳時代初頭（庄内式期）の集落（居住域）が確認されていることから、今回の調査によりこの集落（居住域）がさらに北へ拡がる可能性も考えられる。

## [古墳時代後期]

この時期の遺構は6層上面で検出した上坑（SK201）がそれに相当する。この時期の遺構は当調査地周辺では確認されておらず、今回がはじめてである。検出遺構はこの一基だけなので集落（居住域）が存在したのかは明らかではない。特筆すべき点は、5層上面で捉えた井戸（SE201）から耳環が、落ち込み（SO101）からは、後期古墳より検出される須恵器長脚二段透し高杯の杯部細片が認められることである。これらの遺物は、後期古墳の副葬品としての意味合いが強いもので、当地周辺における第6層上面の延長線上にこの時期の墓域が存在していた可能性が考えられる。今後の調査に期待したい。

## [平安時代末期]

この時期の遺構は5層上面で検出した井戸（SE201）・溝（SD101）・落ち込み（SO101）がそれに相当する。第25次調査地においても平安時代末期の集落（居住域）の存在が確認されているが、本調査地でも同時期のSE201が検出されたことから、一連の集落（居住域）がさらに北へ拡がることは確実である。しかしSE201は、構築層が同じであるSD101に切られていることから、その存続期間は比較的短かったことが想定される。

## 引用・参考文献

- ・西岡三四郎 1977「人面土器」『八尾市史（文化財編）』八尾市役所
- ・坪田真一 1998「II 東郷遺跡第44次調査（TG93-44）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1989「I 東郷遺跡（第11次～第16次・第18次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告17』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1996「IV 東郷遺跡（第49次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・駒沢 敦 1984「2. 東郷遺跡第17次調査」『昭和58年度事務概要報告（財）八尾市文化財調査研究会報告5』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・米田敏幸 1986「東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要」八尾市文化財調査報告13』八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1989「東郷遺跡」「東郷遺跡・田井中遺跡」（財）八尾市文化財調査研究会報告17』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・米田敏幸・鶴村友子 1986「1. 東郷遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告12』八尾市教育委員会
- ・西村公助 1988「14. 東郷遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』（財）八尾市文化調査研究会報告16』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・酒 斎 1995「東郷寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要7』八尾市教育委員会文化財課
- ・広瀬雅信 1989「萱振遺跡を調査して」『八尾あれこれ 文化財講座記録集 財団法人八尾市文化財調査研究会報告21』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・生田維道・小林義孝 1982「第5章調査の成果 第1節繩文時代晩期」『山賀（その4）』（財）大阪文化財センター
- ・広瀬雅信他 1992「萱振遺跡」大阪府教育委員会
- ・山上 弘 1989「成法寺遺跡発掘調査概要・IV」大阪府教育委員会
- ・高萩千秋他 1983「成法寺遺跡」八尾市教育委員会
- ・福田英人他 1986「成法寺遺跡発掘調査概要・I」大阪府教育委員会
- ・原田昌則 1983「第1章宮町遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度』（財）

八尾市文化財調査研究会

- ・成海佳子 1990「I.小阪合遺跡（K S89-18）」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度（財）八尾市文化財調査研究会報告18』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1993「II 小阪合遺跡第19次調査（K S90-19）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告3 （財）八尾市文化財調査研究会報告41』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1989『小阪合遺跡 （財）八尾市文化財調査研究会報告15』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・消 斎 1995『東郷庵寺発掘調査報告』『八尾市文化財紀要7』八尾市教育委員会文化財課
- ・成海佳子 1991「8. 東郷庵寺第36次調査（TG91-36）」『平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告

註

註1 1998年7月16日毎日新聞朝刊を参照した。

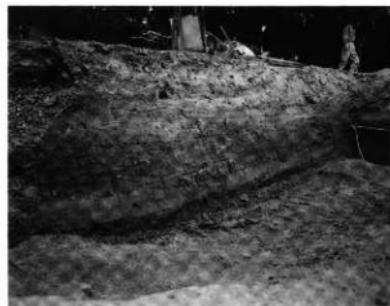
図 版



調査地周辺状況（北から）



機械掘削状況（東から）



西壁地層堆積状況（南東から）



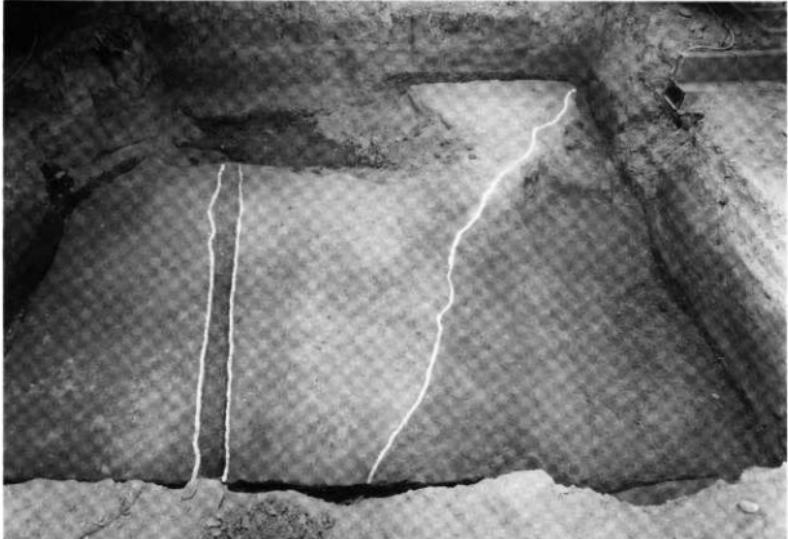
北壁地層堆積状況（南東から）



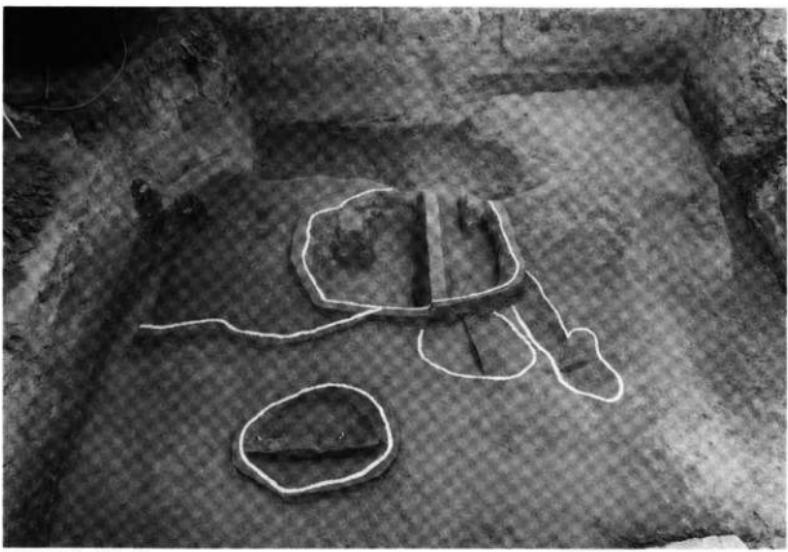
東壁地層堆積状況（南西から）



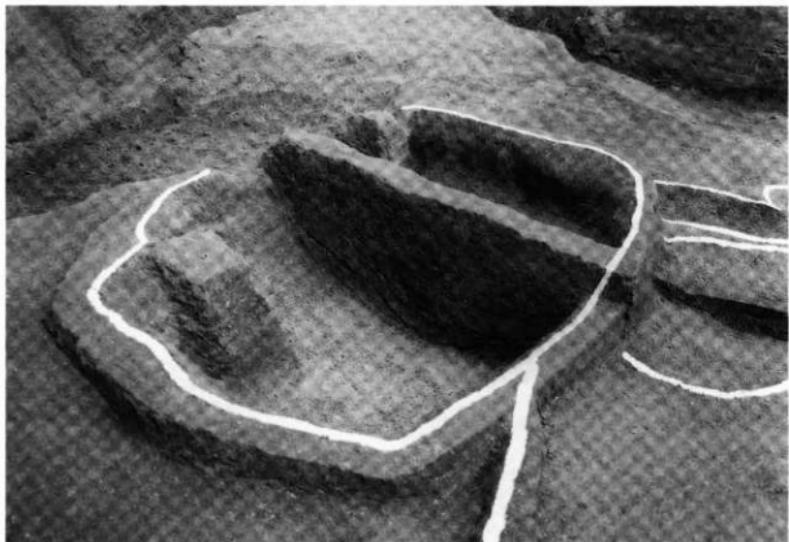
東壁地層堆積状況（T.P.+5.5~7.4m）



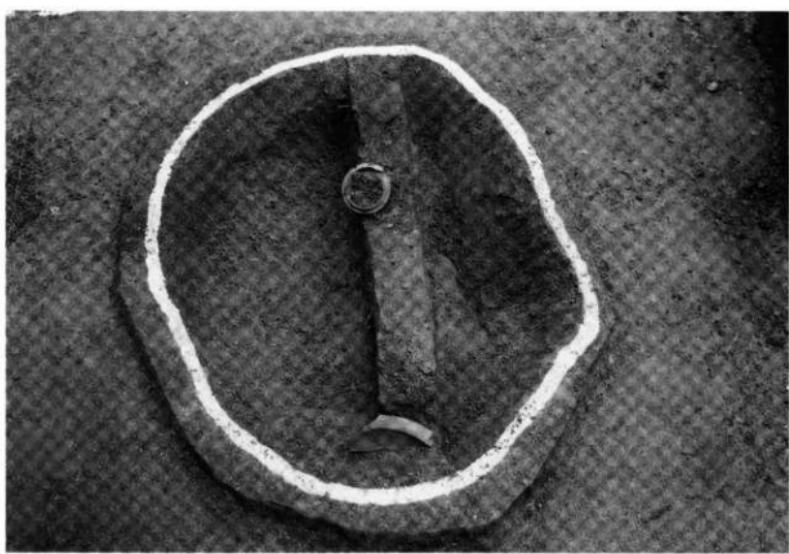
第1面全景（北から）



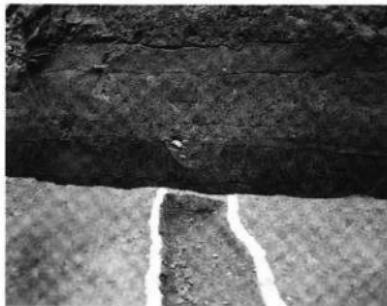
第2面全景（北から）



S E 201 (南東から)



S K 201 (東から)



SD 101（南から）



SE 201埋土断面（東から）



SE 201耳環出土状況（南西から）



SK 202土器出土状況（西から）



調査参加者

